

教職大学院 Newsletter

No.192

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2025.03.31(公開版)

実践研究ラウンドテーブル:実践し省察するコミュニティ」の 味を問い直す

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園・富山国際大学 連合教職開発研究科

特任教授 柳沢 昌一

福井大学で2001年より、年2回、重ねられてきた「実践研究福井ラウンドテーブル:実践し省察するコミュニティ」について、そのはじまりから携わってきた者の一人として、いくどか、その意味と構成について考えをまとめてきました。この取り組みは、「実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聴き取る」という中心的なコンセプトとそのためのセッションのデザインにおいて当初より今日まで一貫していますが、同時に、常に新たな可能性の実現に向けて、再構築され続けてもいます。今回、ニュースレターにおいて、改めラウンドテーブルについて考えをまとめる機会をいただいて、長期にわたる実践の中での省察をめぐる省察的コミュニケーションの場・ひらかれたコミュニティとしての「実践研究ラウンドテーブル」の意味と構成について、問い返していきたいと思います。月ごとに重ねられている教職大学院の合同カンファレンスや夏冬の集中講座において、時々口頭で確かめてきていることと重複する部分も多くなりますが、読んでいただければ幸いです。

最初に、実践の中で、当事者として実践のプロセスを改めて探り検討することの意味、実践の中での省察の意義について、またその困難さについて、確認しておきたいと思います。

Ⅰ 実践経験を通じた学びの重要性と困難さについて

実践の中での探究・省察の決定的な重要性:それぞれの探究とそのコミュニケーションを重ね、協働関係を培い、それを通して学び合うコミュニティと、一人一人の探究しコミュニケーションし協働するコンピテンスが形成されていくプロセスを支える教育実践の展開を求めようとするとき、その複雑なプロセスとそこにある展開の意味は、外部に立ちその外形を、しかも断片的にしか観察できない傍観者の視点に立つ限りは理解することはほぼ不可能と言わざるを得ません。そうした立ち位置から実践プロセスはブラックボックスのままであり、外部からの「インプット」と外部への「アウトプット」のみがチェックされることとなります。内部で展開される実践の脈絡に参加し、ともに探究し、省察しようとする当事者の(あるいはそうした展開の同伴者や後から記録を通して内的展開を跡づけ探る省察的探究者の)状況・活動の展開とともに動く視点と思考を通してしか、そ

内容

巻頭言	(1)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(6)
ラウンドテーブル報告/感想	(12)
長期実践報告会感想	(41)

のプロセスを捉え意味を探ることはできないと思います。教育実践をめぐる問いを深めるために、それをさらに組織化し協働の研究として発展させていくために、実践の中での、実践そのものの展開・組織、そしてその意味・価値をめぐる探究・省察を深めていくことは、決定的な重要性を持っていると思います。それは何よりもまず教育実践の力を培っていく専門職としての学習にとって、そして教育実践研究の深化にとっても、さらにはより広くそうした実践と研究に支えられてこそ進む教育改革の展開にとっても不可欠かつ中核的なアプローチとなると考えています。

実践の内部での学びの困難さ：「問いの閉鎖」の必然性 しかし、現実には、実践プロセスのただ中で、実践への探究・省察を深めていく営みには幾重もの困難さがつきまとい、また立ちほだかってもいます。実践が現に動いている中での判断は、猶予なしの状況で行わざるを得ない場合も少なくありません。一つのまとまりのある活動が展開された後にも、次のサイクル、あるいは別な系の企図に、ふり返る余裕もなく取り組まざるを得ない状況は私たちにとってむしろ通常のことであり、活動を休止のできる場面では、むしろ実践の脈絡から意識をもぎ離し忘れることが精神の健康を保つために優先せざるを得ない、というより優先すべきことであることもたしかだと思えます。実践に当事者として関わり続けつつ、その中で省察を深めること、とりわけ中期的な展開プロセスを探り下げ、意味を問う省察を実現していくことは工夫を要する、きわめて困難な営みとならざるをえないことを実感せざるを得ません。実践の内での問いは、実践の複雑さとそしてその持続の重みから、内部から封鎖されてしまうこととなります。経験してみてもはじめて見えてくることへの問いが断片に止まり、そこでの経験と省察に基づく、事後的な知見や知恵を踏まえた発展的な再構成にはつながらず、結果として経験以前の、事前の枠組みが温存され繰り返されていくこととなります。

こうした内的な状況を克服するために、通常は、外部の視点からの提起が求められることとなります。しかし、先ほども指摘したように、固有の実践の状況

と経過を顧慮することのない外部からの「提起」は、その状況の打開につながるものが少ないとして驚くにはあたらないと思います。時としてそれが展開につながった場合があったとしても、それはむしろ幸運な偶然と言わざるを得ないのではないかと思います。外部からの提起が功を奏する可能性があるとすれば、それは内部での省察をいくばくか触発する契機となる場合であり、結局はこの展開は、当事者によるその後の思考と活動の展開による他ないと考えます。内部での省察の根深い困難さと外部からの断片的な提起の脆弱さは、たとえそれらを合わせたり折衷したりすることによっても乗り越えることは難しいと思います。

II 実践の中での省察深化の可能性をひらくために

実践の中での省察を深めていくことの、幾重もの困難さを踏まえたときに、どのようにしてその力を長期的に培い実現していくか、そのアプローチについて探っていくことが改めて求められることとなります。この課題をめぐって、私たちは明治以降の日本における学校における学習研究・授業研究、社会教育における実践研究の展開とその記録、デューイの企図を継ぐショーンらの組織学習研究、その発展としても位置づけられるウェンガーらの実践コミュニティ研究の展開を探りながら、同時に福井における学校や社会教育の場における実際の協働実践と省察の積み重ねを通して学んできました。

省察的実践の力を培うための三つのアプローチ この課題について、『省察的実践者の教育』の中で、ショーンは三つの連動するアプローチを提起しています。ショーンは、省察的実践の力は、通常の方法で実践の外部で伝達したり教授したりすることができなかつつ、実践の中に、また実践と実践の間に、以下の三つの連動するアプローチを自覚的・意図的に進めていくことによってこそそれが実現されていくことを多様な実践事例の詳細な検討を通して示しています。その第1のアプローチは、なにより、実践プロセスを追うこと follow することであり、二つ目は協働して実験的な取り組み joint experimentation を進めることであり、三つ目はそれぞれの実践展開を

照らし合わせることでできる状況 Hall of Mirror を創ることです。(ショーン, 2017; 柳沢, 2016)

実践展開の中での省察機会のインターバルとそのマネジメント：しかし、ショーンのこうした提起によっても当初の問題、実践の場において省察を深めて行くことの困難さの問題はある意味、手つかずで残されています。時間の余裕のない実践の場の内部に、いったいどのようにしてそうしたアプローチを展開する時間と空間をつくってあげればいいのか。そうした実践の継続的な展開のサイクルの中に省察の時空をひらくための工夫・アプローチが求められることとなります。このことと関わってショーンは *The Reflective Practitioner* 第9章の中で、「1週間、一ヶ月、何年にもおよぶプロセス」、教育も含むそうした長期的な実践プロセスの中にある「省察の機会を提供してくれるインターバル（省察のための機会を提供する合間）による区切り」に目を向け、次のように述べています。(ショーン, 2007, p.297)

「私たちは、まさに、実践の当事者が行為の中の省察の機会を作る事を学ぶ、その方法を、実践における art、精緻なわざの中心に置くべきなのである。」(ショーン, 2007, p.298)

考慮・思考のために実践から離れる、あるいは双方を分離するのではなく、実践のサイクルの中にあるインターバル・合間に、省察を深める時空をつくっていくこと、それを工夫する「わざ」を発展させることが重要、というより決定的な意義を持つことをショーンは指摘しています※。そしてこの指摘に関わって、ショーンは実践の展開に役立つ「記述のあり方」を共有することの意味にも触れています。(ショーン, 2007, p.299)

教職大学院における実践と省察のサイクルとそのデザイン、そして年2回のラウンドテーブルもまた、実践の中での省察のインターバル、その年サイクルにおける実践と省察の間合いを探りながら構成されてきています。出発当初より、当時の附属中学校の、校内研究の年サイクルに基づき、実践の展開の中でそれを支える探究サイクルを創るために構成され、

実践の継続的な展開を基盤とし、省察・研究の機会のサイクルを組み込むことによる省察的実践の発展をめざす取り組みの積み重ねを通して調整発展しています。

実践の展開の継続的なサイクルの節目に、適切な間をおきながら省察を継続的に深化させていくための複合的なアプローチを展開していく、個々の実践の場の状況を踏まえた実践と省察のサイクルデザインの探究と発展が求められていると思います。実践し省察するコミュニティのデザインが求められているのです。ただ、ひとまとまりの実践と実践のあいだにある間で行われる省察深化のための取り組みは、しかし、その間の狭さゆえに、断片的なものに止まりやすくなります。そうした限界を超えていくために、その都度の展開の記録を大切にし、一つ一つは当初は断片的ではあっても、その後のサイクルで、その後の展開と省察と結びつけ、編みながら繰り返し問いをつなぎ構成していくことによって、次第に長期的なプロセスの跡づけ、省察的な探究を構成していくことが重要となってきます。福井大学における実践力形成のためのカリキュラム、省察的な実践研究、そしてラウンドテーブルセッションは、そうした長期的な実践省察と探究の編成を支えるために構成されています。

※このことはおそらくウェンガーが実践コミュニティ育成の7原則の中で「コミュニティのリズム」を感じ調整していくコーディネーターの営みの重要性について指摘していることと密接に関わっているとおもいます。

実践の長期的な展開を省察しコミュニケーションする機会としてのラウンドテーブルのデザイン：長期的な実践をめぐる省察を発展させ、交流・共有していくために、そのコミュニケーションの場としてのラウンドテーブルは以下のような構成を取っています。(柳沢, 2009)

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)

- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

実践の長い展開を語る上では、語り手には実践の個々のサイクルを踏まえつつ、それをより長い連続的な展開として捉え返していく、長期的な省察に取り組むことが前提にあります。多くの報告者は実践の場での取り組みの一まとまりのサイクルに止まらず、インターバルを置いて展開され、持続される以後の、また以前のサイクルとの関係を探りなおしていくことが必要となります。時々記された実践の記録を、展開に即してとらえ返しながら、通常は切断してしまいがちな実践の長期的な展開へと問いをひらき、またそれを捉える自分自身の叙述の枠組みを構築していくこととなります。ラウンドテーブルと長期的な記録づくりの取り組みは密接に関連しています。記録に支えられることにより、ラウンドテーブルでの語りは、記憶に頼った語り合いとは次元の異なる展開の精緻な跡づけを含むものとなり、またこうした長期的展開に耳を傾けともに考える聴き手に出会う機会、その真価を共有する機会があることによって、書き手・語り手の困難な省察の営みが支えられることとなります。

そうした省察によって紡ぎ出された語りに誘われて、実践の状況を思い浮かべつつ、語り手の思いや判断に接しつつ、自分自身もまたその状況を共有しつつ思考することを通して、私たちはまだ経験したことのない実践状況と展開を追い(追経験し)、互いの実践の中での省察・判断の力を発展させていくこととなります。

III 長期的な実践省察が求められる理由

これらのこととも関わって、なぜ、長期的な実践過程の省察が重視される必要があるのかについても触れておきたいと思います。時間の制約が厳しい中、省察を短い枠組み、たとえば45分の授業や一回のワークショップ・研修・イベント等に限り、その中で実現しようとするアプローチが、繰り返し提起されている現状がある中で、なぜ敢えて年サイクル、そして数年の単位での長期的な省察のアプローチをめざす必要があるのかについては、その理由の説明が求められると思われるからです。

その理由はおおよそ次の3点になりますが、それらは実際には連動しています。

コンピテンス形成のサイクル：第1点は、私たちが焦点として支えるべき学習過程が、断片的な知識や手続きの伝達に止まるものではなく、これからの社会の主体として協働して生きる子どもたちの力、コンピテンスを培うことをめざしていること、そしてそうした力(コンピテンス)の形成が長期にわたる実践的な学びと省察的な再構成のサイクルに支えられてはじめて可能となることによります。そして子どもたちの学びを支える私たち自身の力を培う過程は、これまでの長い学習過程を経ているわけですから、その省察的な展開にさらに長い再構成への取り組みとその持続が求められることとなります。それらは、学習の単サイクルを優に超える、発展的な持続が不可欠となります。この持続の必要性は、第2点、その土台となるコミュニティの生成発展のサイクルに関わってきます。

実践コミュニティ生成のサイクル：人の学びの根本に、世代のサイクルを通したコミュニティへの漸成的な参加(Legitimate peripheral participation)のプロセスがあること、そしてそのコミュニティの発展的な展開が、それぞれの世代の成長を支える基盤となること、これらのウェンガーらの提起は、これまでの内容伝達の「教育方法」に特化した研究と実践の枠組みの根本的な転換を求めるものであり、また社会的な学習のプロセスを実践的に問い進め発展させていく上で不可欠のアプローチでもあります。ウェンガー

たちが多様な事例に基づき描き出すコミュニティの展開サイクル [コミュニティの可能性を探り (I)、立ち上げ (II)、持続を支え (III)、さらなる展開可能性に挑み (IV)、次の基盤変化の段階に進む一連の段階] は、短く見積もっても3年～5年の継続を要する長期的なプロセスとなります。

組織・機構の構成・再構成サイクル: 実践コミュニティは、それを支える組織・機構の在り方にも大きく左右されています。実践コミュニティの継続的な発展を支えることのできる組織・機構をどのように構成・再構築していくかは、一人一人の学びを支えるコミュニティの展開をめざすためにも、そうした組織の担い手の一人でもある私たちが引き受けなければならぬ重い課題となります。組織・機構は、その基礎に法的な、また予算的な裏付けが不可欠となることによつて、コミュニティとは質的に異なる重さを帯びることとなります。これまで教育実践に焦点を置く実践者、そして研究者は、これらの問題を「外的事項」として関心の外・責任の外に置くことが多かったと思います。しかし、私たちの学びが公教育の組織・機構に支えられていること、そしてその意義を思うならば、学びとそのコミュニティを支える組織・機構の発展サイクルへの問いに視界をひらき、その当事者の一人として取り組んでいくことが求められると思います。その発展サイクルをめぐる取り組みは、世代を継ぐ企図、公教育の歴史的な展開のサイクルへと拡大していくこととなります。教職大学院、教育に関わる専門職のための *professional school* というまったく新しい組織・機構への企図が始まって四半世紀、そして自ら考え学び社会を構成する力の実現を理念に掲げる近代公教育というプロジェクトの出発から200数十年の長期的な展開の中で、私たちの実践のサイクルが占めている位置を探り、展望をひらくという課題があることも、視界に入れておきたいと思えます。

IV ラウンドテーブルの新たな展開

長期的な実践の展開を探り省察し、再構築への展望をひらいていくアプローチが必要となること、そしてそのフレームを実践の基盤にあるコミュニティや組織制度的基盤の展開に関わるより長期的なフレームへと拡大していく必要もあることを確認していく中で、問いは公教育改革の企図につながっていくことになりました。最後に、そうした企図と関わる近年のラウンドテーブルの展開に触れておきたいと思えます。

子どもたちの参画: この間のラウンドテーブル展開の大きな力となっているのは、福井の、そして全国の子どもたち、小中高校生が自らの探究・プロジェクトを互いに交流するゾーンの発展だと思えます。実際の子どもの学び合う姿を目の当たりにすることで、教師の実践展開の意義と価値を実感する状況が生まれてきています。そしてそれは、探究を重要なコンセプトとする公教育改革の現段階とその可能性を私たちが子どもたちとともに共有する場ともなっていると思えます。

研修改革の渦: もう一つ、このこととも密接関わりますが、子どもたち主体の探究する学びを支える教師の力を培うための「新たな教師の学び」の実現を目指す取り組み、「研修観の転換」に挑む教職員支援機構と各県の教育センターの共同の企図とラウンドテーブルとの結びつきです。子どもたちの主体的対話的で深い学びと相似となる教師の探究的な学びを支える研修への企図、そしてそれを支える機構の組織学習という連動する企図は、ラウンドテーブルのデザインとサイクルとも結びながら展開されていて、この企図の中心的な担い手のみなさんが、福井でのラウンドテーブルに継続的に参加してくださっています。


世界的な改革の企図との連携: 最後に、世界的な教育改革との協働についてです。アフリカを中心に、学習者中心の学びとそのための学校づくり・教師の学びの転換に取り組みを担うみなさんとの福井大学との協働はこの10年あまりの間に大きく展開してきてい

ます。とりわけエジプトにおける新しい学校づくり（エジプト日本学校 Egypt Japanese School）に関わっては、その学校を担う先生方が4週間の福井での協働探究に継続的に取り組まれています。これまでに14サイクルが重ねられ、560名の先生方が子どもたちの探究を迫る専門職としての協働探究を重ねてこられました。このサイクルの中でもエジプトと日本を結ぶラウンドテーブルを行っています。これまでに福井で学び、エジプトの学校で試行錯誤しつつ実践を重ね、また仲間と省察しつつその記録を作ってきている先輩達の報告が、これからそうした取り組みを進めようとして日本で学んでいるみなさんにとって大きな励ましとなっています。私たちもそうしたセッションに参加しながら、エジプトにおける学校づくりの着実、というよりは飛躍的な展開に接し、学び合うコミュニティを培う結ぶことの意味を改めて実感するとともに、その力強い展開から、公教育改革という重すぎる課題への希望を与えられています。

ラウンドテーブルの意味を現時点で改めて捉え直す中、思いのほか長い叙述になってしまいましたが、いまだに部分的な省察に止まっていると思います。実践の中での省察を深め広げていく、重要で困難な企図を支え合うために、これからもそれぞれに、またお互いに、問いを深めていくことができたらと思います。

参考文献

ショーン『省察的实践とは何か』鳳書房, 2007.
 ショーン『省察的实践者の教育』鳳書房, 2017.
 レイブ/ウエンガー『状況に埋め込まれた学習』, 1993.
 ウエンガーほか『コミュニティ・オブ・プラクティス』, 2003.
 淵本幸嗣「福井大学連合教職大学院におけるエジプト教員研修」教師教育研究 12, 2020より第13回研修の省察に到る一連の論稿。
 柳沢昌一「ラウンドテーブル 実践し省察するコミュニティを結び支える」『教職大学院ニューズレター』No. 11, 2009. 3. 31
 柳沢昌一「省察的实践者としての教師の学習コミュニティを支える: 学校拠点の専門職コミュニティとそれを支える省察的機構への展望」教師教育研究 9, 2016.

 ミドルリーダー/マネジメントコースだより

2年間を振り返る前に

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス女子中学高等学校 **高橋 美幡**

間もなく大学院生活も修了である。2年間の総括は次号にとっておくとして、今回はこの1年間を振り返りたい。

私は図書館専従の司書教諭として、授業と図書館を“いかに繋ぐか”ということを常に意識してきた。しかしあまりうまくいかず、大学院に入学した目的も、その答えを欲していた部分大きい。大学院では自身の実践を話す機会が多くあるが、普段授業を持たない私は、1年目、これまでの自分の歩みと授業外での生徒との関わりを中心に振り返ることしかできずにいた。2年目は中学1年生の総合的な学習の時間のメイン担当、高校1年生の総合的な探究の時間のサブ担当となったので、そこでの実践を中心に振

り返ることができた。これまで単発で資料の探し方などのレクチャーを行うことはあっても、通年での指導経験は初めてであったため、本当に苦労した。詳しくは長期実践報告書にまとめてあるが、とにかくカリキュラムをこなすことに精一杯で、肝心の生徒の様子をあまり見とることができなかった。比較的授業外では生徒に寄り添って支援できていたと思うが、授業担当者という立場になった途端にそれができなくなった。おそらく、最終的にそれなりの成果にまとめることができるようにしなくてはならないという思いが先行してしまっていたからであろう。

本校の探究活動の課題の1つとして、テーマ設定の難しさがあげられる。一般的に探究活動のサイク

ルは、①課題の設定②情報の収集③整理・分析④まとめ・表現という4つのプロセスを行ったり来たりしながら進めていくものである。そして最初にテーマを定めても、調べを進めていくうちに変わっていくものである。しかし生徒の様子を見ていると、最初に設定した課題に固執しているように感じることもある。テーマや周辺情報を調べる中で大きな概念から徐々に絞ってゆく、または狭すぎる概念から広げてゆく作業が必要であり、そのためにさまざまなシンキングツールを用意しているが、生徒の思考が整理されているかは疑問である。マンダラートであればマスを埋められないし、マッピングであればほとんどキーワードを広げられない。そしてシンキングツールをうまく活用できないまま、なんとなくテーマを決めて調べ始めるのである。また、テーマを探している時に本が無いと言って諦める生徒も見られるが、本が無いのではなく、情報をうまくキャッチできていないだけのこともある。図書館の立場としては、知りたい情報を探す力、エビデンスを求める気概、ファクトチェック能力育成の必要性を痛感している。ど

うしたらそうしたスキルを向上させられるのか。探究活動を通して身に付けることを目標としていたが、いつの間にかそれが目的となってしまう、うまくいかなかったように思う。

他校の探究発表会を見学させていただいた時に、同校の先生が仰っていたことで印象的であった言葉がある。それは、「探究の学びが深いかどうかではなく個人の取り組みの“熱量”“を見る」という言葉である。頭では分かっているつもりであったが、改めて言われると本当に自分はその見ることができていたか、反省させられる言葉であった。探究活動がどうしても調べ学習から脱却できないという悩みがあるが、なぜそうなるのか、どうしたら解決できるのか、答えはこの言葉に集約されているように思う。探究活動で大切なのは、リフレクションである。見える化することが難しいことやつをいかにうまく具現化させることができるのか、まだまだ私の探究活動は続く。

学びのストーリーの続きを描く

学校改革マネジメントコース1年履修/大野市教育委員会

松山 奈美江

あつと言う間の1年間でしたが、深い省察と多くの学びがありました。教職大学院での学びをスタートした時には、「長い展開を追い跡付け、捉え直す」「プロセスをストーリーとして叙述する」「理論と実践を往還する」「実践の省察を多重多層に行う」ことの意味が理解できませんでした。

しかし、紹介された書籍や先輩方の長期実践研究報告書を読んだり、仲間の実践を聞いて語り合ったり、大学院の先生方に悩みや迷いを相談したりする中で、「実践を省察する」というプロセスや意味が、実感を伴って理解できてきました。

「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読んだときは、「私の実践はこれに当てはまる」「こんな風実践できたら、もっと改善できたかも」と、自分の実践が本に書かれている理論と結び付いていくことが楽しくて、「実践と理論が結び付くってこういうことか」と実感できました。「学習する組織」を読んだときは、「なぜうまくいかないか」と一つ一つバラバラに見えていた問題が、システム思考ですべてつながり、1つのシステムの視点での新たな捉え方ができ

たことに驚きと感動がありました。「専門職として学び合う教師たち」や先輩方や大学院の先生方の長期実践研究報告を読んだときには、自身の実践への向き合い方や長期実践研究報告の書き方への見通しが持てました。自分自身の悩みや葛藤、気づきを、子どもや教職員の姿を通して描くことの意味が理解できました。

教職大学院で共に学ぶ仲間とのグループセッションは、私にとって最も楽しい時間でした。立場や経験の異なる方の話を聞いて、違った見方や考え方を学んだり、同じ立場の方の話を聞いて共感し自分の思いや考え方の再確認や自信につながったり、異なる年代、立場への理解、その方自身の性格や個性、考え方、経験への理解を深めたりすることは、楽しくてたくさんいい刺激をもらえ、私自身の新たな気づきや学びにつながりました。しかし、毎月カンファレンスを積み重ねるうちに、もっと深い学びが生まれていたことに気づきました。仲間やファシリテーターの先生方に問われたことの意味を考え直し、実践を捉え直したり、実践に対するその時の捉え方を再構築

したりといった学びが、自分の中で起こっていました。「なぜファシリテーターの先生は、あの場面での質問をしたのか」「あの時グループで出ていた意見、私が発した言葉は、改めて考えるとどういう意味だったのか」など、カンファレンス後にもう一度省察するようになりました。この経験は、長期実践研究報告を書く上で重要だったと思います。

この長期実践研究報告を本格的に書き始めた12月には、頭の中でそういった様々なものがつながり始めており、このつながってきたものを書いて残したいと思いました。でも、いざ書き出そうとすると、どうしても思い描いている通りに文章が出てきません。構想図を書いてみても、書きたいものが糸が絡まったようにごちゃごちゃになり、なかなか自分のテーマや柱が見えてきませんでした。「やっとならぬつながりが見えてきたのに…」「どう書けばそのつながりが書き表せるか」と悩み続けました。読み手の先生方に話を聞いてもらったり、途中経過を見せて「本当はこう書きたい」とうまく言葉にならない思いを伝えたりしながら、その絡まった糸を一緒にほどいてもらいました。

綴っていく過程でも省察は続きました。教職大学院で学んだように、自分の過去の経験と現在、書籍の理論と自分の実践、他者の実践と自分の実践など、いろいろな場所を往還し、何度も立ち止まって修正、加筆し続けました。その過程は、果てしなくて辛かったけれど、私自身の見方、考え方、捉え方が変容したり、新たな学びにつながったりして、この「書く」時間が、何にもかえがたい経験となりました。

今は「もっとここに残って学びたい」という気持ちですが、「これが新たな学びの始まり」だと思っています。教職大学院に来なければできない学びがありました。これから先は、新たに得た教育観で、学びのストーリーの続きを描いていきたいと思っています。1年間悩み続けた教育委員会で、来年度は少し成長した指導主事として、学校改革をマネジメントしていけたらと思っています。

この教職大学院で、たくさんの素晴らしい先生方との出会いがあり、言葉では言い尽くせないほどの経験と学びを得させていただきました。このご縁を大切に、今後も学び続けていきたいと思っています。1年間、ありがとうございました。

言葉にして届けること

ミドルリーダー養成コース1年/岡谷市立岡谷北部中学校 **中野 晃宏**

この1年は「対話」を軸に教材づくりをしたり、先生方と「対話」を意識しようと共有したことで、さまざまな活動で取り組んだりしてきました。1年間やってきたことで感じたことは「実際に言葉にして取り組んでいくことの大切さ」でした。

「『対話』で一年やっていこう」ということについては前年度末から、授業の改善について考えるグループの先生に相談しながら、研究内容について話をしていました。軸にするものが決まることで、先生方が一丸となって教育活動に取り組み、同じ方向性に向かうことで、次年度以降への課題が見え、さらに改善案が出て次に進んでいく、という先に繋がる展望を抱きながら考えていました。しかしその反面、研究テーマや目標は考えた人や関わった人が一生懸命に取り組み、それ以外は適当になってしまうのではないか、形骸化してしまうのではないかという思いも抱いていました。

新年度のスタート。新年度の職員会議で研究テーマについて提示したところから始まりました。「対話」をしていくためには、落ち着いた環境や多様な考えを尊重することが必要であるために、学級づくりや生徒指導との連携が欠かせず、また、各教科で意識的に取り組み、どの教科でも実践していくことで対話が活性化することを話しました。すると、前任校で班型の座席配置にすることで、生徒同士の話し合いが増えたという話を教えてくださったり、各集会で生徒同士が話し合う場面を設けたり、積極的に実行するための手立てを各職員が講じていました。生徒会の中にも「対話」が1つの柱として今年度位置付けていたこともあり、対話をするのが当たり前のような雰囲気できていました。実践を発表したり、研修をしたりすることに関しては、まだ抵抗があったり、不満があったりすることもありましたが、1年目はそれぞれの職員ができる限りで実践をしていた1年となりました。

また、教職大学院を通じた学びは、私に大きな刺激と新たな発見、言語化することの大切さに気づかせてくれました。教職大学院での月間カンファレンスやラウンドテーブルでは、言語化することがどれほど大変で、どれほど意味のあるものかを実感した1年でした。言語化することを通して、自分のこれまでの実践がどんなきっかけや関わりがあったのか、自問自答しながら意味づけ、価値づけにつながっていると感じました。また、言語化して伝えたことで、「対話」を軸に取り組んでいくことの課題や、職員の実践のふり返りについての悩みや課題の部分など、自分が今悩んだり、考えたりしていることをどうしていくとよいのかははっきりとしてきました。

今年度の1年間本校で取り組んだことと、月間カンファレンスやラウンドテーブルで語り合ってきたことを通して、来年度は、職員も「対話」をしていくようにできればと考えています。自分が言語化していくことでどれだけ実践をふり返って次に生かせるようになっていくのか。言語化して伝えることでどれだけ新しい考えや発見、悩みや課題、解決策が出てくるのか。そんなよさを見つけられた1年でもあったので、今の学校の職員でそのよさを実感しながら紡いでいく1年にしたいと思います。そんな1年にしていくためにも、来年度の初めに思いを言語化して、言葉にして取り組んでいこうと思います。

改革への道のり、いざ始まる

学校改革マネジメントコース1年/福井県立福井商業高校 石田 洋志

昨年度、マネジメント講習の受講および教職大学院での事前履修という貴重な機会をいただき、1年をかけて学校を改革する具体的な実践に向けた構想を大事に温めてきた。他校の先進的な取り組みをお聞きし、また本校のこれまでの実状を鑑みて様々な改革の必要性を痛感していた私は、生徒にとって、また先生方にとって必ず実り多い実践になっていくだろうと強く期するものがあった。

令和6年3月29日、新年度の職員会議において80名弱の教員に対して私は話をする時間をいただいた。本年度学校改革に向けて私が実践を推し進める上での大きな第1歩であった。お互いによく知り合った関係とはいえ改めて、教職大学院での校内実践として学校改革に向けた具体的な取り組みを始めたい、という私の宣言とも取れる説明は、聞き手にとっては多少なりとも抵抗感を持って聞くことになってしまったのではないかと想像する。これまでの本校の長き伝統と歴史にメスを入れることは、先生方に新たな取り組みや考え方の変容をお願いする、場合によっては多少窮屈で何かしらの負担を強いることにもなるのでは、と心配する気持ちも私は抱えていた。そのような中での学校改革に向けた船出だったので、軌道に乗り航路が安定するまでにはなかなか時間がかかった。

学校改革マネジメントにおいては対話を重視し相互理解を柱にした、生徒が主役の学校現場をともに作るコミュニティの育成に努めようとした。教員が

互いの実践を見聞きし、語り合う場としての組織〔C-Net: Communication と Network の造語〕を立ち上げた。C-Net から学校改革の提言を行い、実践していくことをねらった。多くの先生方が自発的に参加し、当事者意識あふれる教職員集団の形成を目指した。

C-Net の取り組みの大きな柱として、①教員の業務改善・働き方改革の推進検討、②教員の座談会、③若手教員育成の場を掲げ、先生方の疑問や不具合等について慣習で行われてきたことだからと無理に納得させることなく、先生方でいろいろ議論する機会とした。運営委員会や職員会議では C-Net の活動方針について他の教員に対して丁寧に説明を行った。教員対象のアンケートでは本校生徒に対する各教員の願いや、学校に対する切実な思いがうかがえた。毎回テーマを設けて参加者で議論を重ねてきたが、教員の思いが現れる場となり、次の具体的な取り組みへのアイディアも多く聞かれた。目に見えないが教員間での意識の変化が少しずつ顕在化してきたことを感じている。

以下は、本年度の取り組みを簡単にまとめたものである。新年度に向けた職員会議では、教職大学院での校内実践について全教員に対して説明した。授業改善への取り組み、そして学校改革への取り組みの2つについて説明をした。4月以降、定例の運営委員会および職員会議では、私の学校改革に向けた取り組みの具体的な説明を行い、開催した C-Net についての報告を行った。会を進めるにあたり数回、全教員

に対してアンケート調査を実施して、より正確な実態把握に基づいた現状分析に努めた。本校教員の生徒に対する意識調査、やってみたい取り組み、業務改善・働き方改革への提案など、出てくる意見はとても興味深いものであった。開催後は会の様子を伝えるため、また会で出てきた意見をまとめて次回へとつなげるために『C-Net 通信』を発行し、校内メールでお知らせした。実際に会に参加された教員からは、会の内容をもう一度振り返ることができてありがたいという声を、また参加されなかった教員からは、会の様子が具体的に記してありわかりやすいという声をいただいた。

C-Net は2月末までで8回の実施にとどまったものの、毎回テーマを設けて約1時間、参加した教員でいろいろなことを検討した。話がどんどん発展していき、設定した時間を超えてもまだ話が続いた回もあった。第1回(5/16)は本校教員の福商生に対する意識調査、目指すべき福商生の姿についてアンケート結果をもとに話をした。第2回(6/26)では本校の学校教育目標・スクールプランに沿った望ましい生徒育成について検討した。第3回(7/17)は座談会として1学期をゆる〜く振り返った。私が上手に会をまとめようとしたために余計な緊張が参加者にも伝染し、自由に発言できる場を作れなかったという反省はあったものの、会を重ねるごとに自由に意見が出てくるようになり救われた気がした。

9月の職員会議では2学期以降の取り組みを提案し、新たなアンケートをもとに本校生への望ましい働きかけについて話し合う素地作りに努めた。第4回(10/17)では気になる生徒の様子、また2学期にやってみたい取り組みについて話をした。第5回(11/6)では働き方改革に目を向け、今すぐできる業務改善について意見を交わした。教員の校内業務に対する不都合、不満、疑問の声は大きく、日々の業務のなかでそれぞれが感じている困り感が明るみになり、参加者が互いに賛同する場面も見られた。第6回(12/18)は、2学期のゆるい振り返りとともに、互いの個人的な話を聞くことで、思わず心安らぎ、また場の雰囲気はほっこりとした。お互いを知ることで相互理解がさらに深まり、より良好な関係性を築くことにつながった。

12月末から1月上旬にかけて実施したアンケートをもとに、第7回(1/30)では校内研修、教科横断型授業の展開について話し合った。生徒が他教科でどのような内容を、どのように学んでいるのかに関心を持っている教員が多く、生徒が各教科をいかに関

連付けて学ぶことができるようになるかに話が及んだ。第8回(2/27)では各教科の年間指導計画をもとに、異教科の学習内容を結び付け、来年度に向けた合科的な取り組みが話し合われた。これまで教科横断型授業の展開例が少ない本校にとっては画期的な企画となり、次回第9回で継続して話し合うこととなった。

教員がお互いの実践を語り合う、そして聞き合うという場がなかった本校において新たな文化を作り上げようという私の挑戦は、想像以上に困難な始まりであった。しかし会を進めるうえで、毎回準備の段階から資料作りを手伝ってくださり、また私のアイデアに対して建設的な意見をくださる教員がいる。会の参加者はいつも8〜10名で当初から増えもしなければ減りもしないが、このような“コアメンバー”に支えられてこれまで順調に会を進めることができている。感謝の気持ちでいっぱいである。今は次年度に向けた構想に、今年以上にワクワクしている自分がいる。

これまで職員会議で会の様子を報告し、『C-Net 通信』にて広報してきた。「行けないけど、アンケートは回答したよ。」とか「どんな会なんか、一回見にいいかな。」という声をかけていただくことが増えてきた。このような好意的な意見がある一方で、「何をやっているのかわからない。」あるいは「勝手に話して、その後どうするつもりなのか。」という否定的な意見も出てきた。このような考えに対して私としては努めて前向きにとらえるようにしている。私が石を投げたからこそ生じてきた波紋であると考えている。始まりは何であれ、本校の教員が学校のことや生徒のことについて話をするきっかけになれば私の行動は間違っていなかったと胸を張って言える。さらには、C-Net で出てきた、例えば業務改善などの取り組み案を次にどのような手順で変えていくのか、などの現実的に変えていく手だてについては、これまでそのような組織や議論がなかった本校ではとても大きな壁に思われる。しかしこのこともまた学校がより良い方向に向かうために必要なステップであるので、みんなでしっかりと話をして進めていければいいと考えている。私はこれまで以上に丁寧に周囲の理解を得る努力を続けていきたい。会での話し合いの様子を見てみると、話をする教員は本当に熱心に思いを語り、そして聞く側も誠実に耳を傾けている。その姿を見て毎回心から、純粋で素晴らしい時間だと思う。

学校は誰のものか？答えは明らかなのに、なかなかその答えに向き合えないのはなぜか。生徒のため、学校のため、そして実は我々教員のため。この思いを本校の学校全体で共有して、教員が誇りを持って学び続けるプロ集団として目の前の生徒と向き合う日が来るまで、私の学校改革に向けた挑戦は終わらない。

「全世代対等ごちゃワーク(12/12)」に参加した時のこと。企画した高校生が最後に訴えた。『授業は、学校は、このままでいいのでしょうか！？』その言葉

がとても印象に残っている。このように声を上げて想いや考えを伝えてくれる生徒は本当にごくわずか。大部分の生徒は声を上げることなく、教員は生徒の悲痛な思いに気づくことも改善策をさぐることもない。私は今後も、生徒の声なき声にしっかりと耳を傾け、彼らの心に寄り添う姿勢を大切にする教師であり続けたい。教職大学院での学びが私を大きく変えてくれた。その感謝の気持ちを忘れずに、明日からまた目の前の生徒、福井の未来の宝に対して誠実に向き合っていきたい。

学校改革マネジメントの最優先課題は？

学校改革マネジメントコース1年/沖縄県宮古島市立狩俣小学校 平良 優

「学校改革マネジメント」とは、学校をより良くするために、組織全体で目標を設定し、計画を立て、実行し、評価・改善していく一連の取り組みである。学校改革マネジメントは、学校がより良い教育を実施し、児童生徒の成長を支援するために不可欠な取り組みである。

私は、昨年度まで学級担任であった。PDCA サイクルや OODA ループで日常の実践を高めていくなかで、大きな障壁となっているものがあつた。

「大きな障壁」、それは、「時間」である。

勤務時間内に、「児童と雑談をする時間」「教材研究をする時間」がほとんど無いのである。教諭の時間のゆとりは、児童への教育の質に直接的な影響を及ぼす。

そのため、学校改革マネジメントの最優先課題は、

「時間の創出」

と考えていた。

本年度、新米教頭として宮古島市立狩俣小学校に赴任し、校長に進言し・提案し、校長の判断に基づき、次の「時間の創出」を行った。

1. 「授業1時間カット」(毎週月曜日)

1・2年生は4校時になり、3～6年生は5校時になる。年間30時間の授業カットとなる。

2. 「キープクリーンデイ」(週2回)

給食後の清掃をしないキープクリーンデイを設定し、児童の下校時刻が30分ほど早まる。

3. 「クラブの時間」(6校時実施→5校時実施)

本校では、年に6回、金曜日の6校時にクラブの時間が設定されていたが、5校時の授業をカットし、5校時にクラブを実施。

4. 「ランチミーティング」の設定

本校では児童数が少ないため、給食は全員がランチルームで食べる。毎週水曜日は、担任のみ職員室でランチミーティングをする。(前年度から実施)

5. 「複式学級担任への配慮」

本校は、1年生と2年生は単学級であり、3・4年生、5・6年生は複式学級である。複式学級の担任は、教材研究が2倍である。そのため、次の配慮をした。

- ・朝の活動の時間を他の職員で実施
- ・フリーランチ日(給食)の設定

6. 「学期末整理期間」の設定

各学期末の1週間～10日程度、4校時授業とし、学期末整理をする時間を設ける。

7. 「特別日課」の設定

児童と職員の心身の疲労が大きくなる運動会や学習発表会等の期間は、特別日課を設け、1校時を8時25分から始め、児童の下校時刻を早める。

8. 「校務分掌」の負担への配慮

時期によって、仕事力の多い職員への支援を行う。(その支援の具体的内容はそれぞれ)

9. 「朝の活動」の削減

2学期から毎日行っていた朝の活動を毎週金曜日のみとする。

10. 各種朝会の精選

校長講話、委員会発表以外の朝会はカットした。

ここまで、10の取り組みを記してきたが、職員の声を聴き、校長に進言・提案し、校長判断の下ままだ多くのことを実践した。

5月の段階で、ある中堅の男職員が、優先生(教頭)にお礼が言いたいと話しかけてきた。

「こんなに時間を創ってくれて本当にありがとうございます」

笑顔で感謝の気持ちを伝えてきたことが印象的な出来事であった。

このように「時間の創出」の視点から、職員の心身の健康に配慮したシステム作りを行った。

さて、「時間の創出」による効果はどうだったのだろうか。

「時間の創出によって、職員は具体的にどう変わったのか？変わらなかったのか？」

「子供たちは、どう変わったのか？それとも変わらなかったのか？」

その結果は、学校アンケート(児童、保護者、教員)、QU、学力等において、大きく変わった。

詳細は、ラウンドテーブル等でお伝えする。(笑)



ラウンドテーブル報告/感想

語り合い 学び合う ラウンドテーブル

学校改革マネジメントコース1年/福井大学教育学部附属幼稚園 澁谷 喜代子

福井ラウンドテーブル、こういった研修には若手のメンバーが優先的に学びに行けばいいといった感覚でずっといた。思いがけず教職大学院で学ぶことが決まり、自分もこの場を経験しておかなければと慌て、初めて参加したのが一年前。幼児教育の現場しか知らない自分が、多種多様な職種の方々の話についていけるのか？と、とにかく緊張していたことを覚えている。聞き手としての参加ではあったが、口下手なので、グループセッションに苦手意識をもっており委縮していた。そんな心境だと時間も長く感じそうなところ、それが思いのほかあっという間に過ぎてしまった印象があった。そこには充実感があったからなのだと考える。語られる実践を、自身の実践に重ねながら聴くことができ、これまでの実践を振り返り、問い直しすることができた。そこには何かしらの思いもわいてきて、上手くは喋れないにしても、そのときに感じたこと考えたことを、私も口にしたかなと思う。若手、ベテランなど関係なく、誰にとっても学び合える場であり、必要とされる場であることが分かった。これまでに2度、聞き手として参加をして、福井ラウンドテーブルの雰囲気を掴み、そしてその偉大さにも気づいてこられた。

さて今回、私にとって3度目のラウンドテーブルは、初めて報告者としての参加となった。グループ内一人目の報告者として、100分という大きな枠が与えられた。ディスカッションを含めての100分とは言え、そんなに語るができるのかと不安を抱えながらの挑戦となった。はじめに、これまで保育の経験を積み重ねてきた自身の地元高浜町での取り組みと、その取り組みからのご縁で、教職大学院や福大附属幼稚園と結びついた経緯をさらっただけお話をした。そして、今年度から所属の福大附属幼稚園の研究概要を一部切り取って説明した上で、実際の具体的な保育実践事例を報告した。

幼稚園の研究概要については、「好きが広がり、世界をひらく(研究副題)」について、学年の発達に応じたプロセスを、幼稚園の資料をもとに、どこまで自分の言葉で語れるか試してみることにした。すると、頭では分かっているつもりでも、上手く説明しきれない自分がいた。これまで幼稚園で積み上げられてきた取り組みに、一年目の私は、とりあえずついていだけで、自分事としてとらえきれていなかったのだろう。語ってみて気づかされたことである。ただ、不十分な説明であっても、グループの皆さんは巧み

に汲みとっていただいた。高校の先生は、そのプロセスの流れは「(年齢を) +10 しても同じことをやっている」と言われる。このサイクルは幼少期だけのものではなく、ずっと繋がっているということが感じられ、嬉しく思ったと同時に、この幼少期の土台作りが最も重要になってくるという考えも強くなった。

これら幼稚園の研究概要(一部)を踏まえた上で、実践事例の報告を続けた。現在進行中の事例を書き記していったのだが、省察までは間に合っておらず、資料としては未完成な状態だった。しかし、この場合は“語る場”と捉え、語っていきながら思いや考えを整理し、グループの方々と語り合いのなかで省察していこうと考えていた。実際に語っていくと、前日に参加した『Session II』の「Zone A」で語り合われた「子どもの主体性」や「ジェネレーター」が、頭によぎった。主体性を大事にしながら子どもに寄り添っているつもりだが、とっかかりとして導入を行い、それを展開させていこうとする行為は、主体性を削っているのか?ジェネレーターのように、子どもの中の一員として一緒に楽しむことをしながら、次なるきっかけを仕掛けていくことに努めているが、それも主体性を考えたときに、余計なことをしてしまっていないかと悩むところでもある。主体性については、考えれば考えるほど混乱してきてわからなくなる。そんなことも語っていった。主体性といっても何でもが許されるわけではない。やはりある程度の制限や枠組みを設けることも大事で、その中でできることを考え、自己発揮していくことが、主体ということなのだろうか。実践事例を聴いていただき、「主体性を発揮するには安心感が必要」との声もあった。私

もそれは一番だと考える。これからも繰り返し主体性については考え続けるのだろうなと思った。

あと、研究主題(副題)に基づいて実践してきたことに関し、「主題に立ち返ると見えてくるものがある」という意見を聞く。たくさんいる職員の共通理解は難しいが、主題にのっとり取り組むことで同じ方向に向くことができ、それが大事なことだと改めて感じたとのことだった。手法はいろいろあっても、目指すべきところは共有しておきたいところだ。

こうして、途方もなく思えた 100 分という枠は、結局のところ少しオーバーするくらいまとまりなくダラダラと話してしまったようだった。そのあとのお二方の報告はまた、関心を寄せる報告であった。

今年度で開校 6 年目の大宮国際中等教育学校の関田校長は、「実践報告というよりも学校のプレゼンです」と言いながら報告された。最前線をいく未来の学校の姿を見た感じがした。学校教育の目指す具体像が見え、そこに向けて教師はもとより、生徒も保護者も、そして世間もが、これまでの概念や価値観を未来の世の中に向けたものへとシフトチェンジしていかなければならないのだろうなと思った。前日の Session I 教職大学院改革特別フォーラムでの、「行政・メディア・大学が果たす役割とその協働」についての話が思い起こされた。探究する学びへの実践は、より広く共有されていかなければならないことが分かる。

未来への展望も見据えていきながら、目の前の実践にしっかりと向き合っていきたい。そのような思考にもさせられるのが、ラウンドテーブルなのかなと感じた。

新たな気づき

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井大学教育学部附属特別支援学校 村上 瑠菜

大学時代からラウンドテーブルに参加して、学生としては最後のラウンドテーブルの参加となりました。ラウンドテーブルでは、世代や校種を超えたいろんな人たちがグループが編成される中で、私は参加するごとに新しい視点を持つ場となっています。今回は、Zone セッションとクロスセッションを中心に振り返っていきます。子どもの学びと教師の学びは相似形であると言われていますが、今回のラウンドテーブルに参加して再度実感しました。

Zone セッションでは、Zone F に参加しました。南桜塚小学校の中田先生から、「ともに学び、ともに育つ」教育について報告していただきました。また、附属特別支援学校の岩佐先生から「様々な活動や人との係わりを通し、自己理解を深めて、自分を受け入れていく」という高等部での取り組みについて紹介していただきました。

南桜塚小学校の取り組みから、集団での学びと個での学びのどちらも大切にされていることがわかり

ました。集団の学びは、みんなが無理なく学べる環境があると感じました。ここから、環境づくりについて、子どもたちが係わり合う中で、障害のある子もない子も、みんなが安心・安全な場であることから、自分たちの思いややりたいことが出てきたり、少しずつ他の人のことを理解したりするという他者理解にもつながってくると感じました。

附属特別支援学校の報告からは、個の学びと個と個がつながる学び、さらにコミュニティ全体で支える大切さが語られました。個の学びを支えることを出発点に、子どもの思いを受けとけて丁寧にやりとりを重ねていったり、気持ちを整理していったりすることで、少しずつコミュニティが広がってくることがわかりました。

私はインターンシップ以外にも、週1回、心のパートナーとして特別支援学級で活動していました。交流の時間に原学級の子どもたちと関わる時があります。関わる時間の短さからなのか、私が係わっている子どもは安心して関わるのが難しいと感じています。

安心した場をどのように作っていくのか。ただ同じ時間を過ごしていくと安心安全の場が作られるというわけではないです。お互いにどんな人なのか知っていく過程を共有したり、少しずつやりとりしたりする時間を取るとよりお互いの理解に繋がってくると感じました。担任の先生と話をした時、私が係わっている子どもはできないことに対して、他の子どもに申し訳ないと感じているようです。時間をかけてゆっくりと取り組むことになると思いますが、できないところではなく、自分の得意なところに目を向けて生かせるようになるといいなと感じています。

2日目のクロスセッションでは、私のグループには高校生が参加していました。私の報告からは、“見通し”について、見通しとひとまとめにしたとしても

意味合いはいくつもあると話題に上がりました。私は見通しについて、時間割の確認といったように、「今日はこれがあるよ」「これをしてこれをするよ」という時間的な意味合いの見通しと、経験を重ねていく中で見通しが生まれてくるというイメージで報告をしていました。

聴き手として参加していた高校生から困難な状況になった時、自分のなりたい姿をイメージして頑張って取り組むと語られました。ここから、“なりたい”ことは見通しにつながるのかと問いかけられました。私は大きな見通しとして、“なりたい姿になるためにどうしていくか”と考えると、スモールステップを踏んで細かく考えていく必要はありますが、見通しの1つではないかと考え始めるようになりました。私の中での、見通しの意味が広がりました。

私は「できない中でも何ができるのか」と前に向くためにどうしていくのかインターンの生活の中でも、実践に取り組むときでも考えていることがわかりました。実践では、子どもに合わせて取り組むために、実践をしてはその都度、教材を作り変えていました。取り組みば取り組むほど何をしたかったのかを見失ったことがありました。このまま自分の取り組んでいることを続けるよりも、一度仕切り直しをするために、担任の先生の課題に取り組むことをしました。また、私はインターンが始まったころ骨折をして、これまで頑張ってきたことが台無しになってしまうと絶望しました。絶望の中から何ができるのかを考えて常に取り組んでいました。私は意識してやっていることではなく、報告を通して、私が行動していることに自分の中での気づきがありました。

このようにラウンドテーブルでは、様々な人との対話を通して新たな視点や学びを得ていきました。この新たに得たことを4月から教員になった時に生かしていきたいです。

教師教育という視点からの学び

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井県立若狭高等学校 橘 慶成

福井大学副学長松木先生のあいさつで、将来どのような社会を作るかという観点から、市民、世論に対して次の担い手となる児童生徒の育成を、公共の中の学校として取り組んでいる学びの様子を発信することの重要性を教えてください特別フォーラムは始まりました。福井県教育長の藤丸様から「地域の未来と教育」と題して福井県の未来に向けた第6期県教育振興基本計画や地域の希望とWell-Beingが関連にあること、ご自身が取り組まれた2040年を想定した高校での特別授業などの様子をお聞きしました。我々福井県の教員が、これから児童生徒を率いて通る未来への道筋を教えてください、安心して教育に励むことができると実感しました。

福井新聞みんなの新聞推進室長の菊野様からは、新聞記事にするために、福井で実践されている学びのストーリーを、生徒を主語にしてつながりが分かるように一般読者にわかるよう紹介していることを教えてくださいました。生徒に取材する中で、「どうということ？」と質問をすると、生徒自身が質問に答える中で新たな発見をしている事や、その情報から因数分解をするようにただ掘り下げるといった記者としての手法は、今の教員に求められているファシリテーターとしての必要なスキルそのものだと感じました。今後は是非使わせていただきたいと思います。教育新聞編集長の小木曾様からは、教育専門の新聞社として、中立ではなく独立、一方向や双方向ではなく循環型として情報を発信されていることを教えてくださいました。学校、教育が良くなると、世界、世の中は良くなるといふ理念は、次世代社会を作る担い手に対する投資であり、民主主義、教育、ジャーナリズムは三位一体という言葉は、今回の特別フォーラムの本質そのものだと感じました。「Edo + Debete = Edubeto」とした教育新聞デジタル版での取り組みは、読者となる教育関係者の関心の方向性がすぐにわかるもので、日本の教育情報最前線を一緒に考えることができると興味がわきました。

福井大学の木村先生からは、教員が独立する専門職から協働的専門職へのパラダイムシフト、そして協創的専門職へのtransformationを、Society5.0になぞらえTeachers5.0と歴史を元に教えてください

ました。文部科学省の石川様から教員免許のない社会人の参画についてもお話を伺った時、報道ニュースで足りない教員を補う為の取り組みと勝手に捉えた自分が恥ずかしくなりました。社会の中の学校であればこそ、社会人が学校で教鞭をとることはむしろ喜ばしい事なのです。そう思えるようになったのも、今回の特別フォーラムのお陰でした。現場の最前線でリーダーシップを発揮されている皆様からお話を聞くことができ、多くの学びを得ることができ、本当に良いフォーラムでした。

午後はZone Bに参加しました。大日方会長に教えていただいた長野県の教育は、とても興味深かったです。公益社団法人信濃教育会は職能団体が前身であることや、現在は長野県の教育を教育委員会と共に支えていること。大正13年の川井訓導事件で教権を確立し、教師の独自性と主体性を確保する全国への先駆けとなったことなど、今の教育に至る原点があると感じました。その信濃教育会と福井大学の教師教育の繋がりが今の連合教職大学院の取り組みに繋がっている事を松木先生に教えてください、なるほどと思いました。また、松木先生からは学問と体験を絡み合わせる事が理論と実践の往還だということも教えてくださいました。そして、教師の見る生徒の姿は、教師が思い描く理想の生徒像であって、そのギャップを埋めようとする教育では、生徒を見ていないという事を教えてください、ハッとしました。教師が児童生徒の目線でその視線の先と一緒に伴走することで、生徒は主体性を発揮し、自走する。そして、それを支える教師には3つのレイヤーを持つことが求められ、成長のない教師にかけているものが何かという事を教えてくださいました。これら基調報告後のグループ対話では、基調報告を振り返り、自分たちのこれまでの経験とすり合わせつつ省察を行い、様々な気づきを得ることができました。

これらの新たな学びが上乗せされたことで、2日目のラウンドテーブルにおいても、自身の思考が深まっている事にも気が付きました。今回の学びは新たな始まりであり、この教師としての成長を授業に落とし込み、学びの相似形として活かして次のステップを歩んでいきたいと思っています。

ラウンドテーブルで刺激をもらい、新たな展望を抱いて

学校改革マネジメントコース2年/法政大学中学高等学校 石川 秀和

はじめに

福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions に対面で参加をした。私が春のラウンドテーブルに参加するのは3回目で、昨年引き続き福井現地で参加をさせてもらった。オンラインでの参加でも多くの発見や学びがあるが、対面で参加し直接対話や情報交換を行うことの方がより多くの発見や学びがあるということに改めて感じている。新たな方々との繋がりを構築できたこと、ポスターセッションや Zone E での生徒の様子から様々なヒントを得ることができた。法政においてもチャレンジしてみたいと思う展望を得られ、ワクワクする感覚を得ることができた。職場の同僚にも是非とも参加を勧めてみたいと思うラウンドテーブルであった。

感想や気になったことの列挙が中心ではあるが、今回のラウンドテーブルを紹介することで、身近な方々にも次年度以降のラウンドテーブルに参加してほしいという一心で「ラウンドテーブル振り返り」をレポートさせてもらいたいと思う。

1. 大雪の福井の地に降りたって

今年の冬の降雪は、東京では季節外れの雪が3月に二度あったくらいで、2月は乾燥した天気が続いた。職場での会議を終え、東京から福井へ向かう際、東京では北陸地方での大雪のニュースが報道されていた。雪用のブーツを履き東京にはまるで不釣り合いな格好で福井入りをさせていただいた。翌朝会場には、慣れない足取りでやっとたどり着いた。玄関で雪を払い、受付に向かっていくと複数の方々から声かけをしていただいた。寒さの中でも非常に心温まる瞬間であった。福井の方々にとっては、降雪はごくごく日常のことではあると思うが、私にとっては非常に新鮮な経験であった。「こういった厳しい条件の中で実践されているんだ」と思わずつぶやいてしまった。何人かの福井の先生方の実践報告を拝読させていただいていたが、文章には現れないものを五感で感じることができた。ポスターセッションを直接聴くことができるなど、現地参加ならではの気づきが得られ、次年度以降の実践でチャレンジしてみたい展望も湧き上がってきた。

2. Zone E で生徒と関わって

Zone E では、『誰もが「居心地」の良い学校はつくれるか?』について中学生と共に対話を通じて探求していった。お馴染みの「えんたくん」を膝の上に乗せ、まさに膝をつき合わせての対話に取り組んだ。3名の中学生と世田谷から参加された小学校の先生、そして私の5名で様々な角度から対話をする事ができた。中学生の皆さんからはえんたくんに次のようなものが出された。

- ・切磋琢磨高め合う
- ・対話
- ・色々な人がいる。互いに尊重
- ・自分らしいを出せる
- ・安心感
- ・失敗しても誰も攻めない
- ・言いたいことを主張できる
- ・思いやりや優しさ
- ・程よい緊張感
- ・男女関係なくみんなわいわいできる
- ・お互いに認め合う

はじめは、ぎこちないやり取りの部分もあったが、アイスブレイクや自己紹介などが終わってからは闊達な対話がなされた。中学生の積極的な姿勢からは、参加した中学生の今後の希望を見出すことができた。同時に法政の中学校でもこの経験を応用できるのではないかという展望が湧き上がってきた。テーマが少し難しい部分はあったようであるが、今の時代状況には必要な対話ができたと感じた。

今回は叶わなかったが、次年度は法政の中学生も実行委員会の段階から関わらせてもらい、オンラインでの開催があれば参加し、刺激をもらうことができると考えた。様々な地域の方々との対話することで、法政での当たり前を相対化し、新たなものを生み出す可能性があると感じた。さらに、自分の学校ではない他の地域の生徒と交流することで大人の側が学ばせてもらうことも多くあるように思う。私たち

の学びの機会としても十分に価値のある対話の時間であった。

3. 民主主義・教育・ジャーナリズムは三位一体

教職大学院改革特別フォーラムでは、「行政・メディア・大学が果たす新たな役割とその協働の可能性」というテーマで行われた。メディアとの「協働」という発想は自分自身にはあまりなく、とても新鮮な気持ちで参加させてもらった。特に教育新聞の小木曾さんの講演からは、大きな気づきや学びをいただき、触発を受けた。

「民主主義・教育・ジャーナリズムは三位一体」というお話は、自分自身が日々行っている教育活動を改めて見直すきっかけを与えてくれた。どれか一つが後退した場合はすべてが荒廃する。一つが後退した場合には、それ以外の2つに責任がある。という点からは、教育という営みの重要性を再認識できた。

また、「学校が良くなれば、世界が良くなる。教育が良くなれば、未来が良くなる」という小木曾さんの信念にはとても共感できた。戦後80年のこの年に小木曾さんの講演と出会うことができたことは、自分自身にとって非常に有意義なことであった。是非とも、生徒保護者と共に講演を伺って、学び合えればと考える。フェイクニュースがはびこるこの世の中において大切な気づきと学びの場を創造することができるのではなかという展望をもつことが出来た。

4. ラウンドテーブルにおけるグラウンドルールの大切さ～初参加の人を孤立させない工夫～

ラウンドテーブルの冒頭では、木村先生から「対話」についての話があった。何となくいつも意識している部分であるが、グラウンドルールを確認することで、参加者の共通認識を確かなものにするにつなげた。初めての参加者やアウェイな感覚を抱いている者にとっては非常に大切な営みであるということに気付かされた。その場で当然となっているこ

実り豊かな対話に向けて～年長者の方々～

- 評価しない
 - 学ぼうとする
 - 質問攻めにしない
 - 同意を得ようとする
 - 教えようとする
- (木村先生スライドより)

とをそのままにすることで、意図せず疎外感を生むことがあるのではないかと考えさせられた。とても小さなことではあるが、これからも大切にしていきたいと思う。自分自身や今の職場にとっても非常に大切なことであると思うので、年長者の方々向けと若い方々向けに示されたものを掲載させていただきたいと思う。

5. 多様な参加者の対話で実践のヒントを得る

今回はこども園の方、高校の教員、そして附属義務教育学校前期課程の方々とは対話に取り組んだ。校種を越えて対話できるのも福井のラウンドテーブルの魅力であるが、今回ファシリテーターの方が民間の経営者の方であったことから、特に刺激をいただいた。教育現場とは異なる視点を与えてくださり、非常に参考になった。人を育てるという部分では共通のことがあるという点も非常に参考になった。

法政での実践を記した自身の長期実践には、「同化型から調和型社会へ」「失敗の7つの視点」について対話をすることができた。法政の実践は同化型に近く、そこでは忠誠心や権威がはたらき、内部告発や恐怖専制もみられるという。生きがいや相互尊敬を大切にすることで、より創造的な実践につながるのではないかとという展望をいただいた。また、「適切な失敗」から「原因についての対話」に取り組み、「繰り返しの挑戦」につなげていくという話題があった。心理的安全性の課題から失敗をとにかくしないように圧力がはたらいっている法政の職場にとって非常に貴重な示唆をいただいたように思う。失敗から学び、生徒・教員が共に育つ職場の魅力を感じたと同時に失敗できない職場の状況を掘り下げていくという新たな課題をいただくことができた。

長期実践報告をラウンドテーブルで対話することで、自分自身の中で内容の深まりや今後の展望を新たに確認できた。次年度の教育実践に旺盛に生かしていきたいと思う。これが参加者各々を主人公にした学びのスタイルであるということを変更して体感させてもらった。まさに福井ラウンドテーブルの醍醐味であると思う。次年度は職場の同僚も交えて参加し、学び合っていきたいと切に感じた豊かなラウンドテーブルであった。

「ラウンドテーブル」がくれたもの

学校改革マネジメントコース 2年/江東区立第二南砂中学校 山田 泰子

たった今、在学最後のラウンドテーブルクロセセッションが終わった。福井大教職大学院に入学してから、一体何回繰り返してきていただろう。他者に自分の実践や考えを聞いてもらい、思考を整理したり、助言をもらったりしたこと、他者の実践や読みとった内容を傾聴し、自分の実践に生かせるヒントや新たな知識を得たこと、それらを自分の実践につなげてきたことは一体どれ程あるだろう。昇任異動し、ただひたすらに尻込みしていただけの私が、ラウンドテーブルにより動かされ、自分ができるような実践を自らしかけていくことができた。そして、それによる先生方の変化や、職場の雰囲気、先生方との関係が大きく動いていった。学びを得、実践する勇気とエネルギーをもらえるラウンドテーブルがこれほどまでに人の挙動に影響を与えるということを、身をもって実感した。

気付けば、自校の校内研修会などでも数回、また、区内の保・幼・小・中連携事業での合同研修会において、このラウンドテーブルを取り入れた。つまらない研修会が始まりそうだと面倒くさそうな表情で集まった先生方は、自らの実践を語り、聴き合うことで、前向きな雰囲気で会を終え、明るい表情で帰っていた。先生方が課題について積極的に対話している姿を見て回っている校長先生にも、これまでの一方通行な研修会ではない、ラウンドテーブルの効果を伝えることができたように思う。

ラウンドテーブルで他者の実践をじっくりと聞くこと、そのストーリーを聞き取ることは、まるで疑似体験をしているかのような感覚だった。分野が違うために聞き慣れない言葉、自分の勉強不足により知らなかったシステムや政策、言葉、理論に触れ、その人の課題解決策を知ることだけでも、どれだけ自分の引き出しが増えたことだろう。また、自分の実践を自分なりに省察して語ったところに、新たな価値づけをもらったり、ヒントをもらったり、調べてみたくなることを教えてもらったりしたこと、与えられる知識ではなく、自ら学びや知識を求めようとするエネルギーをもらうことができた。

間もなく、福井大で定期的に行っていたラウンドテーブルの学びからは距離を置くことになるが、学びを得るチャンスが止まるわけではない。多様な人の話を聞くことは、周囲に人がいるだけでそのチャンスは無限にある。職場で、意図的に自分の実践を語り合う機会を作り出すことで、そこにいる人たちと共に学び続けることができる。校外のコミュニティで行えば、更にその幅は広げられる。今回、福井大のラウンドテーブルで得たことは、ラウンドテーブルによる学びだけでなく、学び方についても手立ての一つとして得ることができたと思う。

長期実践研究報告を書き終え、今日の報告会に向けて改めて資料を作成することで、自分が何を学び得たのか、この2年間で自分の変容についても改めて捉え直すことができた。長い時間に渡る報告を傾聴してもらい、質問していただいた内容で、また考える別の視点をいただいた。今後の展望についても改めて考え、今の悩みについてどのように向き合っていくのか、自分の考え方や捉え方の傾向についても気付かせてもらった。自分を語り、感想や質問をもらえることが、こんなに深く自分を見つめ直すことにつながる。感覚的に楽しいと思う訳である。

「管理職になるにあたり、一度立ち止まってこれまでの実践を振り返るといい。」と福井大学連合教職大学院への入学を勧められた意味を実感し、その目的も達成したように思っている。「教師という専門職にある以上、学び続け、実践し続けることがその責務を果たすことになる。」と言われると気重になってしまうが、自分が自分らしく実践し続けようとするれば、自然と学びは止まらないのかもしれない。

生徒も教員も、次のステージで、更にその先でも活躍できる自信と力を付けてもらいたい。教員になってある時からずっと思い続けているこの思いを実現させるために、先生方と共に、生徒の学びや生徒の成長のために何ができるのかを考え、実践し続けていきたいと思う。そのためにも、引き続き、教育界に限らず、多種多様な人との対話を中心に学び続けていきたいと思う。

ラウンドテーブルという時間で味わえる空気感・爽快感

学校改革マネジメントコース1年/敦賀市教育委員会 松永 敬子

7月のラウンドテーブルに続いて2回目のラウンドテーブル参加となった。送られてきたグループ表を見て、参加者の多さに驚き、また、じっくりとその表を眺めて日本全国様々な場所からの参加があり、参加者の所属も多様であることに驚きを隠せなかった。このラウンドテーブルが歩んできた歴史やつながりが、このように多様な参加を促しているのだと思ひ、私もその仲間入りができたようで誇らしくなった。

今回、私は「語り手」として100分の時間をいただいた。時間を持て余したらどうしようかと不安な気持ちだったが、終わってみるとあっという間だった。今回が初参加の先生と一緒に会場に向かう途中、以前に大学院で学んでいたというその先生の同僚の話になった。「参加すると毎回モヤモヤするけど、そのモヤモヤがいいんだよね。」と話していたそう。私も、月間カンファレンスの度にモヤモヤと、何か消化不良のような感じを抱えていたので、その言葉に大いに共感できた。しかし、今回のラウンドテーブルが終わった後の私は、すっきりとした爽快感を味わっていた。そう思えたのは、たっぷりの時間と、じっくりと聞いてくれる人たちのおかげだったと思う。

このラウンドテーブルでは、次年度の長期実践報告を見据えて、現在地へと続く大きな流れを振り返り、学校教育と私自身のつながりを中心にまとめ、語ることにした。尊敬される教師になってほしいという両親の思いで名付けられたことから始まる私のストーリーは、自然豊かな複式学級で学んだ小学校低・中学年時代、高学年になり学校が統合されたことによる環境の変化や先生に対する思いの変化、英語との出会い、敷かれたレールに抗おうとする葛藤、また、教職に就く以前の社会人としての経験などによって形作られている。初任校でのことは、学びや発見と共に、今となっては行き過ぎとも言える部活動指導についての反省を語った。その際、「真剣に向き合っているからこそその言動で、一生懸命にやっていない人には分からない手ごたえがあったはず。厳しさの裏

にある思いを生徒たちは分かっていたから、生徒も先生も続けられたのでは。」といった肯定的な受けとめをしてもらった。日本人学校での失敗や経験、帰国してからの不本意な異動を通して学んだことすべてが、現在地へと続いているのだとふり返った。更に、教育委員会でのこの一年は、多角的、多面的に学校教育を捉えるためには大切な時間であった。知識の無さと責任の重さから無理だと思った特別支援教育に関する業務は、私が教育行政にやりがいと自覚をもって働くための「特別な支援」だったと今となっては思う。特別支援教育が「特別」ではなく、すべての子どもにとって必要な支援になっていけばいいとまとめて報告を終えた際、「強度の違いはあっても、どの子ども一人ひとり支援が必要だね。」と、私の考えを受け入れてもらえ、嬉しかった。

その後のさくら認定こども園後藤先生の実践は、子どもの実態を見取り、そこから必要な手立てや支援を考えていることが素晴らしかった。ともすると、うまくいかない状況に陥らないように事前に準備をしすぎることもあるが、まずやらせてみて、そこから子どもたちも巻き込んだ活動へと変化させている点が見事であった。静岡県立ふじのくに国際高校眺野校長の実践からは、新設校立ち上げの苦勞、子どもの主体性を追求する学校組織とするための努力が窺えた。今年度1年生のみ在籍の学校は、次年度新たな学年と共に、教職員の数も増えることから、コミュニティ全体がどう変容していくのか、また、眺野校長のマネジメントがどうなっていくのが楽しみだ。このように終始温かな空気感での語り合いができたのは、聞き手の世田谷区立駒繫小鈴木先生、院生の前川さんの傾聴姿勢と人柄のおかげでもあったと思う。

それまでつながりがなかった方々とラウンドテーブルという時間を共有することによってできたご縁は、日常業務の中では得られない貴重なものだ。突然の異動で教職大学院での学びにもすぐ後ろ向きだった私は、この一年の自身の変容に驚いている。人との出会いには、計り知れないパワーがある。

対話を通して見えてきたもの

ミドルリーダー養成コース2年/宮古島市立伊良部島小学校 儀間 裕勝

教職大学院での2年間を通して、ラウンドテーブルという場が、より身近に感じられるようになった。

1日目は、Zone A「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」に参加した。2日目のグループにもZone Aに参加された先生がおり、2日間にわたって「主体的な学びとは?」「子どもの主体性とは?」と考え、対話を重ねた。

Zone Aのグループで、私が担任する4学年の学力の課題と主体的な学びについて話をした。

「たし算ひき算もおぼつかない、字もひらがながやっとなという程度だが、将来、漁業やマリネレジャー関連の仕事をする決めており、この子が今欲している学びは、机での学習ではなく、釣り糸の結び方や船の操縦技術である。欲していない学びに主体性を発揮させられるだろうか。」

他の参加者の先生方と、それぞれの実践を共有し合いながら、「一見、主体的に学んでいるように見えて、そうではない場合。または、その逆。」「教師が、子どもの主体性を狭めている可能性。」などについて対話が重ねられていった。明日から、子どもの主体性を広げられるような働きかけをしていきたいと思えるような、学びの多い1日目となった。最後に、「今日は、とても良い話聞いたなあ〜!」といった感想が出されていたのも印象的だ。

また、1日目で得られた新たな視点の一つに「Generator」という、子ども達と共に学びをつくることに参加する教師像がある。総合的な学習の時間における探究学習に取り組んだ際、子ども達と共に学びをつくっている感覚があった。その経験に「Generator」という形が与えられたように感じ、これから実践に取り組む際の教師の立ち位置として、強く意識していくことになるだろうと考えている。

福井ラウンドテーブルへの参加も4回目となった。毎回、多種多様な参加者との対話を通して、新たな気づきや学びを得ることができ、ラウンドテーブルという対話の場のすばらしさを実感する。改めて、ふり返ってみると、教職大学院入学以前にも、グループでの対話形式の研修はあった。しかし、実のところ、私

は、対話形式の研修をあまり良く思っていなかった。福井ラウンドテーブルは、何が違うのだろうか。その違いは、「ファシリテーターの存在」にあるのではないかと考えている。ファシリテーターの存在によって、グループでの対話が盛り上がり、さらに深く考えるきっかけになったりしていたと思える。

今回のラウンドテーブルでもそうだ。私は、報告者として、長期実践研究報告をもとに話をした。すでに報告会を終えていたが、「本当にこれで良かったのか」という、モヤモヤとした気持ちがあった。結論から述べれば、今回のラウンドテーブルを通して、私の葛藤は、一気に晴れた。その要因となったのは、他の参加者との「対話」と「ファシリテーター」であると考えている。

対話を通して、私の実践や省察に対する新たな視点や価値を与えていただいたように感じた。また、私を含め3人の報告がされたが、全く違う実践等が話されているのに、どこか共通点が見出せる。互いの実践を往還するように対話が重ねられ、他の実践について話をしながら、同時に自身の省察が深まっていた。

福井大学の先生方が当たり前のようにやっているように見える「ファシリテーター」は、実際にやってみると本当に難しい。これまで、私自身がファシリテーターを務める機会が数回あったが、参加者から話が引き出せなかったり、私自身がしゃべりすぎてしまったりと、私の力不足に本気で落ち込むほど上手くいかなかった。この経験は、これからの私の課題として捉えている。

今回のラウンドテーブルは、他の参加者との対話を通じた学びが多かったと同時に、改めて、ファシリテーターの存在の大きさを実感した。まずは、身近なところで(校内研主任でもあるので)、本校の教師達と共に学び合っていくための対話を促すファシリテーターに挑戦していきたいと考えている。今回のラウンドテーブルでの対話を通して、「ファシリテーターができる教師になる」という、私の今後の目標が見えてきた。

Zone A

「主体性」を省察する

北杜市立白州小学校 教諭 宮下 章

初日は Zone A 『子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ～主体的な学びのプロセスを問い直す～』に参加。富山県富山市立堀川小学校の大津賀悟史さん、福井県立若狭高等学校 横田和也さんの発信に対して、全体やグループで応え合う。コーディネーターの香山太輝さんのキレのある問い『主体的とは』に、頭も心も動き出す。

「そもそも、先生が決めた枠の中で『主体的な学び』は成立するのか。」言葉の意味から考えれば、それは『自主的』という表現の方がフィットしそうだ。『自主的』とは、自らが率先して行動することで、一度言われたり教えられたりしたことを他人から言われる前に、率先して行動できるという意味合いがある。一方『主体的』とは、自分で考え、判断して行動することである。『主体的』は『自主的』の上位として位置付けられるだろう。だとすると、国や各自自治体が教育指針として『主体的』という言葉を使う意味合いは、受動的、指示待ちの子どもたちを育てるのではない、という明確な意図の表れなのだろう。そもそも受動的、指示待ちが否定される理由は何なのかは敢えて横に置いておいて（←ここは議論したら実は面白い）、『～主体的な学びのプロセスを問い直す～』というサブテーマは、この Zone A の学びを深める必要不可欠なものであった。

さて、改めて問い直す。【先生が決めた枠の中で『主体的な学び』は成立するのか。】自分で考え、判断する場面が盛り込まれていれば『主体的』になるのであれば、日本はおろか世界中の学校はすべて『主体的』な教育をしていると言えそうである。（これは国の在り方、国民の主体性についても同様のことが言えだろう。）しかし、そうなってくると『主体的』の境界はどこにあるのだろうか。哲学的な話になってくるが、実践発表でもあった通り、先生が決めた枠はあっても、検証の場（省察）が保証されているのであれば、かなり『主体的な学び』に近づくのではないか。一度決めたら、最後までその取り決めに従うということではなく、何度も検証を繰り返し、フレームメイキングに子どもたちが関われる学びこそが『主体的な学び』だと思いたい。

しかしながら、その『主体的な学び』は実現可能だろうか。私はその点においてかなり懐疑的にとらえている。なぜなら、教員たちが『主体的』に仕事をしているかが怪しいからである。教員たちが『主体的』であるためには、教員の自由裁量の保証が必要になってくる。働き方改革も言われて久しいが、《勤務時間》にあまりにもフォーカスしていて、《働きがい》の話題にならない。《働きがい》は自由裁量に直結している。任せてもらえない、タスクばかりの仕事は《働きがい》を高めることはできない。

また、学校教育における民主主義教育にも課題がある。教員たちは一国民としてどれだけ政治に関わっているのか、その背中を子どもたちは見ている。学校の中の民主主義は《学校ごっこ》の一環になってしまい、子どもたちは学校体制を卒業すると、国に対しては『主体的』になれない。

子どもたちも教員たちも、そして人すべてが『主体的』になるということは、多様性に対する寛容なマインドが必要になる。揃えた瞬間に消える主体性に思いを馳せ、ベースとしてバラバラであることの覚悟をすべての人が持つこと。責任もリスクもすべての人が共有し、管理する側に依存し過ぎないこと。依存すればするほど主体性は欠落する。主体性を軽視すればそれは人権問題である。教育は人権の問題なのである。人権意識のない教員は子どもたちの人権に気付けない。

さて、福井ラウンドテーブルは『主体的な学び』の場になっているか。答えは参会者それぞれの中にあるかと思うが、私は是としたい。初日のクリティカルな空間はまさに《検証～省察》ができていた。2日目は一日かけてじっくりとお互いの実践に耳を傾け合う。こんな研修会には出会ったことがない。《主体的に聞く》ことがこんなにも心地よいとは。札幌市教育委員会の西野功泰さん、福井県福井市森田さくら子ども園の橋本宏子さん、福井大学連合教職大学院の酒井俊典さん、福井県立南越特別支援学校の濱本さとみさんとの応え合いの時間は『主体的』な省察の姿勢に満ちあふれていたし、実に多様であった。

福井大学教職大学院は日本の教職大学院を牽引する立ち位置にある。「ねばならない」を超えて、『主体的な学び』をする教員、『主体的な生き方』をする教員を未来に向けても育成し続けてほしい。そんな教員を教室に送ることでしか、子どもたちの『主体的

な学び』は成立し得ない。持続不可能を認識し、絶望に出会ったら、いよいよ『希望』に向けて歩み始めよう。そんな思いに至ることができた福井での二日間だった。

「ずれ」を楽しむ

さいたま市立大宮国際中等教育学校 教諭 佐々木 優介

今回縁あって、初めてラウンドテーブルに参加させていただきました。これまでも自身が学んでいた教職大学院や教職員支援機構による中央研修などの場で、じっくりと時間をかけて対話を重ね、その対話を通して省察していくという経験は何度もしてきました。しかし、今回はそれらとはまた違う、新鮮な気づきと学びを得ることができました。それは、一つは幼保の先生方までを含めた、これまで自分が経験してきたもの以上に幅広く多様な校種の方々と言葉をお交わすことができたということ、もう一つは、これまで継続して行われてきたラウンドテーブルでの積み重ねの上に今回の対話の場があったということに起因するのではないかと感じています。私が参加した Zone A では、「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ～主体的な学びのプロセスを問い直す～」をテーマに、お二人の先生方の実践に基づく話題提供と質疑応答、それらも踏まえながらのグループでの対話が行われました。その中で特に大きな気づきにつながったのは、「教師の立ち位置」、そして「ずれ」という視点です。

まず、「教師の立ち位置」についてです。趣旨説明の中でこの言葉を聞いた瞬間、のっけから「やられた」と思われてしまいました。昨今は教育現場において、「伴走者」や「ファシリテーター」等の言葉が多く聞かれるようになりました。校内外の研修でも多くの場でこれらの言葉を見聞しますし、私自身も校内で若手の教師にアドバイスするときなどに「少ししゃべりすぎかもね。もっと生徒本人から考えが出てくるように関わるといいと思うよ。」などとよくコメントをしていました。しかし、「教師の立ち位置」という言葉を聞いたとき、自分は「伴走者」や「ファシリテーター」を実は単なる手法や手立てとしてしか捉えていなかったのではないかという思いに駆られました。もちろん、今改めて考えれば単なる手立てや手法としか捉えていないというのは言い過ぎだったかもしれませんが、「教師の立ち位置」という言

葉は、まさに自分の「立ち位置」を再認識させられる、とても強い意味を持つ言葉であったと感じます。

次に、「ずれ」という視点についてです。私たち教師は、その大小や、それをどこまで自覚的に捉えているかは様々であるにせよ、授業や行事、学級経営や学校づくりなど、何をするにしても常に何かしらの目標やねらい、ねがいを持って教育活動に取り組みます。しかし、目標があればそこには必ず、教師の目標と実際の子どもの姿のギャップとしての「ずれ」が生じます。そして、目標が明確であればあるほどその「ずれ」は際立って見えてくるでしょう。そのような「ずれ」を、私たち教師は日ごろどのようなものとして捉えているのでしょうか。「ずれ」をポジティブなものとして捉えるか、それとも修正すべき対象として捉えるかによって、それに対する私たちの反応は大きく異なるはずです。その意味で、話題提供の中で富山市立堀川小学校の大津賀先生からあった「教師の予測とのずれはその子らしさの表れ」という言葉は、大変示唆に富むものでした。私たちのグループでは、「ずれ」を教師がいかに面白いと感じることができるかが一つの鍵になるのではないかという話が挙がりました。「ずれ」を修正しながら目標やねらいに向かわせることももちろん大切です。しかし、その「ずれ」は一体何によって生じたのでしょうか。その「ずれ」の中には、我々教師が想定し得なかった、さらに広くて深い学びにつながる豊かな世界が潜んではないのでしょうか。教師と子どもが共に「ずれ」を楽しむような姿勢が、子どもたちの主体的な学びを支え、豊かな学びの地平を切り拓くことにつながるのではないかと感じています。

今回、私のグループは地域や校種、職位や職歴のまるで異なる、いわば「ずれ」のある5人が集まりました。しかし、異なる立場や経験から、必ずしも結論を求めずに一つのことを語り合う場は何とも心地が良く、冒頭でも述べた通り新鮮な気づきと学びを得るきっかけとなりました。福井大学教職大学院の皆様

ならびに、共に対話することのできた皆さんには、このような機会をいただけたことに大変感謝しています。ありがとうございました。

Zone B

学び求め続けること

若狭町立気山小学校 教諭 高橋 朝美

私は今回初めて、実践研究福井ラウンドテーブルに参加した。開催の2日間は対面とZoomのハイブリッド形式で行われ、10年に一度の寒波が襲った開催期間であったが、県外や教育関係者以外の参加者が多く集まり、熱気あふれる学びの場となっていた。

Session IIで、私はZone Bに参加した。このZone Bでは、「教師であることを支える教師教育～信濃教育会と福井大学教職大学院の歩みから～」というテーマで行われた。Zone Bを選んだ理由は、最近特に「学び続ける教師」について考える機会が多かったからである。中堅の年代になり、職場やチーム全体について考えることが増え、その中でチームとして「学び続ける教師」であり続けるにはどうすれば良いかに意識が向くようになっていた。

Sessionの冒頭では、信濃教育会会長の大日方氏、福井大学の松木教授、立命館大学の西村教授が登壇し、まず大日方氏と松木教授から信濃教育会と連合教職大学院における教師教育についての報告があった。その後、グループに分かれて対話を行い、出された意見について全体でディスカッションをし、またグループ内で各自の現状に照らし合わせた対話を重ねた。

大日方会長のお話の中で、特に印象に残った言葉がいくつかある。「(研修は)『自主的・主体的研修』でなければ、本当の力にはならない。求め続けることで、教師としての力が身につく。」「『不易』とは、単に伝統を受け継ぐことではない。」明治19年に創立された信州教育会で大切にされてきたこと

は、今の私にも強く響いた。その後、松木教授から教師教育についての貴重なご提案のお話があった。教師養成の根本についてお話され、子どもの見取りを鍛えることが教師を鍛えることに繋がること、授業研究会における異質者の存在の意義と必要性、教員養成を支える3段階「3つのLayer」についてなど、私には非常に興味深く、学びが多かった。理論的なお話だったが、現在の自分の現場や日々の実践に多くの点で関連し、様々な場面が思い浮かび、考えさせられた。

その後のグループセッションでの対話の中心は「学び続ける教師」についてで、様々な年代、立場、地域のメンバーによる「異質者」の対話が、どれだけ価値のある学びに繋がるかを実証した場だったと感じる。異なるバックグラウンドを持つメンバー同士の対話は、新たな視点や切り口に気づかされることが多く、驚きと学びに満ちていた。その中でも特に心に残ったのは、「教師が変わるきっかけは、子どもの姿」という話だった。やはり、教師を動かすのは子どもの姿や成長であり、そこから「学び続ける教師集団・チーム」を創り上げることがきっとできる。私の中で、ずっと腑に落ちた感覚があった。

今回のラウンドテーブルを通じて、たくさんの気づきと学びをいただき、本当に楽しかった。今回の学びから、「子ども主体の学び」を追求し、そしてそのために「教師が教師として主体的に学び続ける」ことについて、これからも追究し続けたいと強く思う。このような貴重な機会をくださった福井大学教職大学院の先生方に、心から感謝申し上げます。

「当たり前」の意味や価値を捉え直す

長野県総合教育センター NITS 特別研修員 萩原 拓

長野県で中学校教員を20年程勤め、現在は教職員支援機構(NITS)の研修員として、長野県総合教育センターで教員研修に携わる仕事をしています。今回のZone B(教師教育)参加では、これまで当たり前だと思っていた自分の教師としての学びが、非常に価値のあるものだったのだと気付かされました。

私は教員になってすぐ信濃教育会に入会しました。「多くの先生が入っているから」というぐらいの理由で入会したと思います。これまで信濃教育会の活動に参加したり、毎月発行される教育雑誌『信濃教育』に掲載された教育論文や県内の先生方の実践報告を読んだりする中で、多くの先生方から刺激を受け、自分の実践に取り入れたり、教育に対する考えを深めたりしてきました。そして、そのことを当たり前のことと感じていました。

また、松木先生のお話にあった「子どもが見つめる先を教師も見つめる」という言葉は、自分がこれまで大切にしたいと取り組んできたことです。長野県の学校では、子ども理解を大切し、子どもの中から立ち上がる思いや願い、問いを大切にされた教育活動が行われています。授業づくりや授業研究では、先生方は具体的な子どもの姿をもとにして語り合います。そのことも当たり前のことと思ってきました。

これらの当たり前と思っていたことは、信濃教育会や先輩の先生方が長い間育ててきた、先生たちが自分から学び、お互いを高め合う文化であると、その

価値に気付かされました。そして、この文化は長野県の教育の強みであるとも感じました。

では、その当たり前が本当に自分の日常になっているかと問われると、自信をもって「はい」とは言えません。自分の理想とする子ども像を押し付け、子どもたちの「やりたい」という思いに寄り添えていなかったことが多かったと思います。また、自分が校内研修係を担当した時、教育実践を省察したり、互いの教育観を交わし合ったりする機会や文化をつくることができたかということも「はい」とは言えません。しかし、その時々自分の在り様について再認識したことは私にとって意味があると思います。

このような気付きがあったのは、大日方先生と松木先生の話提供だけではなく、自分が昨年度に県外長期研修に出たことや、このZone Bで他県の先生方との対話を通し、自分の教師としての学びについて振り返ったり、立ち止まって考えたりする機会があるからだと思います。また、この原稿を今書いていることも、その機会の一つだと思います。

これまで当たり前と考えていたことや、大切にしてきたことの意味や価値を改めて捉え直し、新たな実践や価値を創造したり、自分の観を更新したりする一。そうした学びのプロセスを、先生方とどのように共創していくかが、今の私の問いです。「信州教育の根っこ」や「3つのLayer」は、この問いを深める手がかりになりそうです。Zone Bでの学びを、今後の実践につなげていきたいと考えています。

教員が教師に育つために～Zone B レポート～

立命館宇治中学校・高等学校 教諭 酒井 淳平

Zone Bでは、大日方貞一先生が信濃教育会の取り組みを、松木健一先生が福井大学連合教職大学院の取り組みを報告し、その後グループ対話や質疑応答が行われました。

大日方先生の報告では、信濃教育会の様々な取り組みだけでなく、信濃教育界が大切にしてきた皆さんの言葉が紹介されました。「教員は学び続けるこ

とで教師になる」「自主的・主体的研究でないと本当の力にならない」「不易とは子どもを真ん中に挑戦することであり、理想を追い求めること(伝統を受け継ぐだけではない)」などがその例ですが、どれも今こそ重要な言葉だと感じました。学びには「仲間」と「場」が不可欠ですが、信濃教育会が長野県の教員を育ててきたことが強く伝わる報告でした。

松木先生は、教師が専門職として成長し続けるための教師教育について報告されました。教師には、子どもが見つめる先を共に見つめるまなざしと、理論と実践の往還を可能にする仕組みが必要です。そのために、教育実践を支える理論と実践の構造として「3つのレイヤー」があるといいます。

第1のレイヤー：省察的实践を支えるコミュニティ。それぞれが実践を語り合う中で、新たな気づき生まれ、次の実践につながる。異質な他者との対話が重要であり、自らを客観視する機会にもなる。

第2のレイヤー：理論と実践の往還を生み出すコミュニケーション空間。実践の中で新たな理論が生まれる場。

第3のレイヤー：社会情勢を踏まえ、教育観や子ども観が実践の中で理論化される場。

成長しない教師には、「目の前の子どもではなく、自分の理想とする子どもを見てしまう」というまなざしがあり、そのことが影響するのですが、実践の振り返りをせず、学びの場にも出かけないようになり、その結果、異質な他者と出会えないといった傾

向があると指摘されました。つまり第1のレイヤーでのふりかえりや対話が不十分で、第2のレイヤーには出会わず、研修などで偶然第3のレイヤーに触れても、それを自分事として認識できないのです。福井大学連合教職大学院では、この3つのレイヤーを意識したカリキュラムが組み立てられているとのことでした。

2日間のラウンドテーブルを振り返ると、初日は第3のレイヤーを感じ、2日目は第1のレイヤーを体験できたと感じています。私は4月から福井大学連合教職大学院の大学院生になりますが、先輩方の話を聞くと、間違いなく3つのレイヤーを体験し、それらをつないで学べると確信しました。実際、Zone Bでの対話では、同じグループに教職大学院修了直前の方がおられました。その方のお話には実践と理論の両方が含まれており、短い時間ながら3つのレイヤーを統合的に学ばれたことが伝わってきました。こうした学びのプロセスを実際に体験できることに期待が高まるとともに、ラウンドテーブルという場の重要性や、福井大学連合教職大学院の学びの可能性を強く感じる時間となりました。

Zone C

いつもと違うコミュニティの可能性

一般社団法人 BEAU 代表理事 小原 涼

私が代表を務める一般社団法人 BEAU は、高校生対象のオンライン探究学習プログラム「BEAU LABO」を運営している。地域の企業や全国の様々な大学から集まったボランティアの大学生とともに、興味のある分野をグループで探究する。私たちは毎年50人以上のボランティアを受け入れている。そのような背景から、ボランティアのコミュニティが参加者にとってどんな場であり、どんな可能性をもたらすのかについて興味があり、Zone Cに参加した。

今回のZone Cのテーマは「いつもの居場所を離れてみることから開ける可能性」。足羽川ふれあいマラソンにおけるボランティアの事例について、大会の運営をしている社会福祉法人足羽福祉会理事長の高村昌裕氏から実践報告があった。もともと地域の方たちが自主的に立ち上げたマラソン大会だが、運営団体の高齢化により継続が困難となったため10年ほど前に足羽福祉会が引き継いだ。地域や世代を超え

て集ったボランティアが互いを尊重しながら見事に連携し、ランナーとボランティア双方の満足度が高い大会を作り上げた事例が紹介された。高村氏の話の中で、「手作り感のある温かくてやさしい大会」という言葉が特に印象に残った。ボランティア一人ひとりが当事者意識を持ち、互いに調和して活動したことが、この大会を成功させる要因なのだろう。

対談では大会ボランティアに参加した90歳の方が経験談を語った。「ボランティアは、してあげるではなくやらせていただいていると思いなさい」と言われ、ボランティアに対する見方が変わったそう。さらにボランティアに参加した中学生からは、ボランティアに参加したことで普段自分たちが地域社会に支えられていることに気がついたと語った。この中学生の方は、ボランティアに参加したことで、地域の人とある意味で初めて繋がれたのではないだろうかかと私は感じた。

小グループでの話し合いでは、いつもの居場所と離れた場所での経験を共有し合った。私たちは、職場と家、学校と家という限られた居場所で日々を過ごしている。近年はご近所付き合いや地域のイベントが減少する傾向にあり、同グループの方の中には今回が久しぶりのいつもの居場所以外の場所だと話す方がいた。私は複数の会社経営をしているため、地域や専門分野、世代、国籍が違うコミュニティに多数関わっている。ある場所で得た気づきが、思いがけず別の場所での課題解決に活かせるといった繋がりが生まれることがある。一見自分に関係のなさそうな場所でも、そこで新たな気づきや学びを得て自分に繋がるが多々ある。むしろ、日常を飛び出してこそ、

新たな気づきや学びの機会が生まれるのではないかなと思う。

今回の Zone C を通じて、地域のボランティア活動は、非日常にアクセスすることができる良い機会だと感じた。確かにボランティアは自身の利益を考えずに社会に奉仕する行為である。しかし、ボランティアという非日常の場に身を置くことで、結果的に自身の視野を広げ、新たな気づきや学びが生まれ、地域の人と心からの繋がりをもたらす機会となる。きっと、足羽川ふれあいマラソンのボランティアの皆さんが楽しく活動し、「次も参加したい」と継続するのも、いつもの居場所を離れてみることから開ける可能性に魅力があるからかもしれない。

「足羽川ふれあいマラソン×ボランティア×コミュニティ」の可能性

社会福祉法人 足羽福祉会 理事長 高村 昌裕

私たちは、主に福井市の東部を中心に大小 30 以上の社会福祉事業を行う団体です。赤ちゃんからお年寄りまで、誰もが障害の有無にかかわらず安心して過ごせる社会を目指して、日々取り組んでいます。

そんな私たちが 10 年以上前に、ちょっとしたきっかけで、地域で 30 年間続けられてきたマラソン大会を引き継ぐことになりました。大会を引き継ぐにあたって、私たちが考えたこと、それは小さくてもボランティア主体による手作りでアットホームな大会の継承です。

地元地域の体育振興会や PTA といった関係団体に協力を仰ぎ、近隣中学校や高校へのボランティア派遣をお願いし、一般ボランティア募集をかける中で、約 300 名のボランティアを確保して、大会運営にあたりました。途中、コロナ禍での大会中止や延期、また開催時期の変更を経て、昨年 11 月には 11 回目の大会を無事終えることができました。お陰様でランナーの評価も高く、参加ボランティアの満足度も高い大会となっています。

その大会にランナーとして参加した本学教員の富永さんが、様々な役割のボランティアの対応にいたく感動してくださり、その謎を解き明かす場として、私をはじめ、大会に参加してくださったボランティアが今回のラウンドテーブルに招待されたのです。

セッションでは、私の発表の後に、協力してくださったボランティアを代表して、ボランティア歴の

長い家接さん、地元団体として協力し続けてくれている佐藤さんの 2 名が、コーディネーターより「なぜここまで主体的に関われるのか？」といった問いに対する一人ひとりの思いを語ってくれました。

またその後にグループワークでは、大会当日に参加してくれた足羽一中陸上部の学生さんや福井大学の学生さんも、参加したきっかけやそこでの気づきなど、他の参加者からの質問攻めにあいながら、一人ひとりの感じたことを話してくれていました。参加したきっかけは「学校の先生からの勧め」だったけれど、やってみて「楽しかった」こと、また「自分たちも陸上の大会などでたくさんの方に支えてもらっていることに気づけた」といった意見に、どうやったら自発的な参加やつながり、成長の機会となるのだろうか？といった新たな問いが生まれ、地域という縦でも横でもない「斜めの関係性」の中で人のつながり、心のつながりが生まれるのでは？といった考察が出ました。様々な立場で参加された方それぞれが感じたことがチャットで共有され、セッション自体が新たなつながりと気づきの場となったようで、不思議な感覚を覚えながら、あっという間の 4 時間となりました。

今回のマラソン大会のように、相手の立場を考えながらボランティアに取り組む中で、感謝されたり、自分の中での気づきが生まれたりすることがあるので、私はボランティア活動やコミュニティを支える

活動というのは、一方的に与えるだけでなく、何かしらをもらっている関係性の行為だと考えます。しかし必ずしも相手の満足、また自分の満足につながらない場合もあります。したがって効果や結果があるから取り組むというのは、実はボランティアの本質ではないのかもしれない。

この見返りを求める「交換」ではない関係性こそ、私たちの社会やコミュニティを成り立たせる大事な要素だと感じます。それは教育や福祉の根本につながっているのだと考えます。親や教師は見返りを求めて子どもたちを育てようとしている訳ではないですし、自主的とも義務的ともなりえる関係性の中で

も、「与えられ、また与える行為」が延々と引き継がれています。それを近内悠太は「贈与」という言葉で表現し、考察を深めています。

最後になりますが、このような機会をいただき、本当にありがとうございました。是非、次年度の足羽川ふれあいマラソンに、ランナーとして、またボランティアとして参加していただき、このラウンドテーブルでの思考の連なりをさらに深めてくださることをお願いいたします。私たちもたくさんの気づきをいただけるのではと期待しております。

<参考文献；近内悠太,世界は贈与でできている,ニーズピックス,2020年)

いつもの居場所を離れてみることから開ける可能性

清川メッキ工業株式会社 清川 卓二

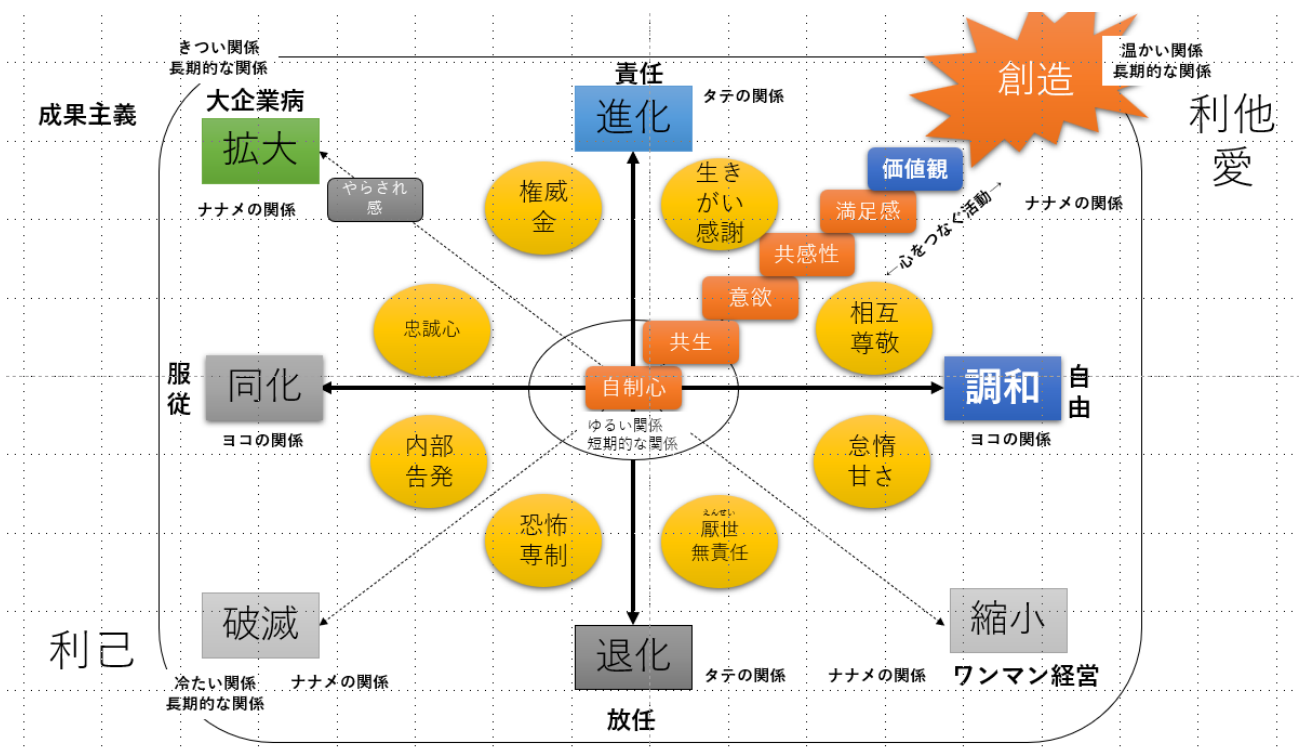
「ボランティアは、するものではなく、させていただくもの」今回パネルディスカッションに参加頂きました家接さんが、92歳の方より頂いた言葉です。足羽川ふれあいマラソンを主催している足羽福祉会高村理事長は、「ボランティアさんは、ランナーに頑張って！ランナーからはありがとう！とプラスの声が行き交う感謝の共生の大会にみなさんのお陰でなっている」と、佐藤さんは、地域の体育振興会役員の義務としてボランティアに参加。しかし、「高村理事長の地域愛と人間愛の念想（おもい：念ずるような想い）に共感し今では、義務ではなく使命としてボランティアをまとめる役割をさせて頂いている」とおっしゃっていました。

我々は日々様々なコミュニティに所属しています。家庭、学校、会社、地域など、そこには、一人一人の考え方や行動があり共生している、共生させて行こうと、葛藤、妥協、喜び、尊敬などの感情が渦巻いています。

タテの関係のコミュニティでは、地位、権威、金で責任を与えられ進化する場合や、無責任や強制により放任することで「やらされ感」が強くなり退化し

破滅、縮小することもあります。また、ヨコの関係のコミュニティでは、忠誠心をあおり服従させることで同化を強要し拡大するが破滅する可能性の高くなります。

ボランティア活動で開ける可能性とは？「強制ではなく共生」のナナメの関係にあると！させて頂くとは、自制心である。相手のことを想うから自分をコントロールできる。相手のことを思いさせて頂くから「感謝の共生」が生まれ、感謝は一人ひとりの意欲を高め、大会としての共感性が高まる。共感性が高まることで、参加者とランナーの満足度が生まれ、長い年月により価値観が形成されていく。価値観とは、時代背景により、人々の生きがいや地域の相互尊敬の中で世代を超えたナナメの関係の中で進化、調和され創造性を生んでいく。ボランティア活動は、短期的なゆるいコミュニティと思っていましたが、実は、長期的なコミュニティで、利他や愛を共生する温かく強いコミュニティを作っていくきっかけである！Zone Cは、いつもの居場所から離れるみることで、日常での進化、同化による拡大への欲望と、縮小による破滅の恐怖から解放され、調和による価値観が創造性を生む可能性を感じる場所でした。



いつもの居場所を離れて集う私たちは、未来を開く

発創デザイン研究室／福井大学連合教職大学院 富永 良史

「今日のこの場も、いつもと違う場所であり、いつもの場所に戻った時に活かせる貴重な経験を得られました。楽しい時間、ありがとうございました」

これは2025年2月22日に開催されたラウンドテーブル Zone Cの参加者が残してくれたコメントである。この日の私たちは、いつもの Zone C以上に「いつもの居場所を離れて集った多様な仲間」として互いを受けとめあったように思い返される。それは「とても優しく、実りある時間」（あるスタッフのつぶやき）だった。本稿では、そのような時間が生まれた道のりを概観する。

1. マラソン大会の感動がテーマを生む

この日、Zone Cは「いつもの居場所を離れてみることで開ける可能性」というテーマのもと、「足羽川ふれあいマラソン」を主催する足羽福祉会の高村理事長と運営を支えるボランティアの皆さんをシンポジストに迎えた。

テーマも話題提供者もこれまでとは様相が異なるように見えたかもしれない。企画スタッフのひとりとして、なぜこのようなテーマと話題が選ばれたのか、企画の発端から振り返っていきたい。その発端が今回の Zone Cの展開に大きな影響を与えたと思えるからである。

2024年11月17日、私は「足羽川ふれあいマラソン」に参加し、深い感動を得た。大会全体にゆきわたるおもてなし精神、共に盛り上げていこうという雰囲気は私に深い余韻を残した。ちょうどその頃、次の Zone Cのためのスタッフの話しあいが始まり、私は雑談のつもりでこの日の経験を話した。雑談のはずが、語っているうちに共感が生まれ、私の経験の意味が発見され、今回の Zone Cへとつながっていった。

発見された意味とは、このマラソン大会を支える多様なボランティアの皆さんが生み出している見事な連携についてである。ボランティアの皆さんはその日のために、いつもの自分の居場所を離れて大会に集う。そして互いの違いを超えて、大会への思いを共有し、仕事を分担し、支えあい、ホスピタリティ溢れる大会を実現する。私たちが注目したのはこの点である。

「日常を離れて、一時的に集う、多様な人たちが、「共に何かを成し遂げようとする時」に、「いつもと違う何か」が生まれる。そこには、私たち一人ひとりにとって有意義であるだけでなく、コミュニティを停滞から救う何かがあるのではないかと。今回のテーマは、こうした思いを背景に生まれた。私がいつもの居場所を離れて、馴染みのないマラソン大会に参加することで得た感動を、いつもの居場所に戻ってわかちあった結果が、今回の Zone Cの始まりである。

2. 実体験から紡ぎ出される語りが揺さぶる

当日は、まず高村理事長から、大会がどのように成り立っているのか、どんな思いで大会を続けているのかなどが語られた。タイトルには「マラソン×ボランティア×コミュニティ～いろんな思いの掛け合わせの先に、どんな楽しく人が集う場、生き方、未来を創造できるのか？」とあった。大会を知っている人も知らない人も「共に考えましょう」という誘い、問いかけとして響いた。

続いてボランティアの皆さんを加えて、大会に関わるようになったきっかけ、その時の思い、いろんな人たちと支えあいながら運営していく時に感じていることなどが語り合われた。「支えているんだけど、支えてもらっている」「（選手を）応援しているけど力をもらってもいる」「苦情もいっぱいもらう。でも喜びが勝っている」「もうせんぞ！と思うこともある。けれど結局、次も参加している」など、実体験から紡ぎ出される語り私達の心を揺さぶった。ある陸上部の中学生は「ボランティアに参加して、実は自分たちも（陸上の）大会で支えられていたことに気づいた」と語った。別の参加者は「聞いているだけでホロッと涙が出そうになった」と語った。

この時、私たちは「支えながら、支えられもする」という関係が日常のあちこちにあることに気づき始めていた。ランナーの応援をするボランティアは、ランナーの姿からエネルギーをもらっていた。ある参加者は「ランナー、ボランティアの区別なく、全員が参加者という思いを持てるから、満足度の高いものになっていると思いました」とコメントした。大会はボランティアに支えられているが、大会の存在が一人ひとりのボランティアの充足や意欲の源でもあった。

3. 私たちはこの日、未来を開いた

その後、小グループに分かれての対話、全体でのわかちあい、ふたたび小グループでの対話、最後に全体のふりかえりへと展開した。

小グループ対話では、高村理事長とボランティアの皆さんの話の感想をわかちあうことから始まり、自分がいつもの居場所を離れた経験について語りあわれた。そこで生まれた気づきは、オンラインのチャット欄に次々と書き込まれた。

全体ファシリテーターを務めた私は、小グループ対話の後の全体でのわかちあいの場で、チャット欄に流れるたくさんの思いを時系列を超えてつなぎ、重ねあわせ、問いかけた。

ボランティア参加した中学生や大学生の言葉を聞いた大会実行委員長は嬉しそうに顔をほころばせた。チャット欄に残された彼のコメントには「ボランティアの皆さんから、「次回も参加します！」と笑顔で言われて、皆さんが、「活躍する場を見つけてくれて良かった」と思うと同時に、毎回、ボランティア全員が、活躍する場を設けてあげたいと思っています」とあった。

別の参加者は「ボランティアの方に、「やらされ感」ではなく「満足感」を感じてもらうことは、とても大切であると改めて気づかされ（ハッと）しました」とコメントし、さらに「縦・横の関係は日常生活では経験しますが、ナナメの関係をきずける場がボランティアにはあるのかなと思います。いつもの場所を離れて活動することによって新たな出会いや学びや宝物があるんだと感じました」「ボランティアは、思いや心を伝えあう場であり、心のつながりをつくる場であり、人生を豊かにしてくれるコミュニティだと思います」といったコメントが続いた。私たちは、ボランティアといういつもの居場所を離れた人たちが集う場所で何が起きているのかに、自身の経験も参照しながら思いを巡らせた。

後半の小グループ対話では、いつもと違う場所に参画した後に、自分や自分の居場所に起きる変化について語りあわれた。全体のふりかえりでは、いつもの居場所を離れてみてどんな可能性が開けてくるのかを共に考え、わかちあった。終了後、参加者はチャット欄に気づきを書き残して退室した。そこには多様な気づき、感謝、新たな問い、未来への意志が溢れた。

ット欄に気づきを書き残して退室した。そこには多様な気づき、感謝、新たな問い、未来への意志が溢れた。

・人が生きていく中でいろいろなフィールドがありますが、それぞれの場で自分を発揮できて自分があると思います。ボランティアの場でも他の場でも自分を出せることにより、また日常の場に帰った時のエネルギーになると思います。まさに今日のラウンドテーブルが、その場でしたね。今日はありがとうございました。

・イベントのようなひとつのゴールがあるわけではない場合、どのように人の心をつないでいけば良いのか。（町内会や職場、学校など）

・ボランティアは人と地域を繋げていくと感じました。日常と少し違う場に参加でき、ありがとうございました。

・初めて Zone C に参加しました。いつもと違うテーマでのお話新鮮でした。意識して違う場所を選択すること、大事ですね。とても心に響きました。

・中学生から高齢の方まで幅広い世代がゆるく繋がれるという点が、ボランティアの素晴らしさだと思います。「どう地域や社会と関わればいいのかかわからない」等を理由に特に若年層で社会とのかかわりが薄れている中で、地域のコミュニティのコアとなり得る可能性があると感じました。

とても紹介しきれないこれらのコメントが、私の目には、高村理事長の冒頭の問い「いろんな思いの掛け合わせの先に、どんな楽しく人が集う場、生き方、未来を創造できるのか？」に対する応答のように映った。

後日、スタッフの振り返りの場で、小グループで生まれた豊かな対話の様子がわかちあわれた。私たちはあの日、いつもの居場所を離れて Zone C に集い、互いのいろんな思いを掛け合わせた先に、調和の中で共に生きる未来への可能性を開いたのだと思う。

本稿を終えるにあたり、今回の「とても優しく、実りある時間」の発端となった足羽福祉会のウェブサイトを訪れた。そこには法人の理念として「共に生き、共に集う、光を求めて」と記されていた。

「持続可能なコミュニティをコーディネートする」に参加して

信濃教育会教育研究所 長尾 小百合

Zone Cでは、「足羽川ふれあいマラソン」に関わるボランティアを通して、持続可能なコミュニティについて考えた。

この大会は社会福祉法人足羽福祉会によって主催されており、その運営は多くのボランティアによって支えられているという。ボランティアには地域住民だけでなく、小中高大学生も社会人も、障害の有無にかかわらず、多様な人が集い、思いを共有し、協力しあいながら、ふれあいとおもてなしに満ちた大会をつくっているようだ。そのように一つのイベントを通して、日常を離れて未知の人たちとなんらかの目的を果たそうとする中で、何が生まれてくるのかを考えた時に、プラス面だけでは語りきれない、私自身のボランティア経験を思い出した。

私は法学部で少年法を専攻しており、少年院のボランティアに参加した。また、少年事件の裁判の傍聴に通う中で、殺人ほう助の罪に問われた少女と文通をすることもあり、高校編入試験のために文通の中で勉強を教えることもあった。当時の私は「困っている人を助けてあげたい。悩みを少しでも取り除いてあげたい」という思いでボランティアに参加しようと決意していた。ボランティア活動に参加して間もなく、少年院のクリスマス会を主催した。体を動かしながらゲームをしたり、私たちが手作りしたケーキを一緒に食べたり、歌を歌ったり…。少年たちが少しでも明るい気持ちになればいいな、と励ましてあげたい気持ちでいっぱいだった。会の終盤、私たちを見送る少年たちの中に号泣している一人の少年がいた。その少年を目の前にした時に「こんな未熟な私が軽い気持ちで参加してよかったのか」と、なんとも言えない気持ちを味わった。様々な職業を経て私は教師になったのだが、あの時の少年の涙、あの時の少年はどんな思いだったのかを問い続けたくて教師になっているようなものだ。ある意味私は、自分自身を変えたくて少年院のボランティアに参加していた。自分の都合でボランティアに参加していたのではないかと思った時に、涙を流した少年の心の内や育ちを何も知らないまま、そして深い心の傷を癒すこともできないのに「助けてあげたい、励ましてあげたい」という一方的な「共感」はただの迷惑行為なのではないか、と悟ってしまった。そう考えだしてから、私はボランティアに参加することは、相当な覚悟を持たな

いと相手に失礼ではないのかと思うようになった。また継続して参加することにこそ意味があり、単発的なボランティアに参加し、よい部分だけを見て「ボランティアした気になる」ことも違うのではないかと考え続けていた。

しかし今回のテーマは、気軽に参加できるような大会ボランティアに関してだった。私はボランティアの覚悟だとか、私の経験から得たことだとか、そんなマイナスなことを語ってしまってよいのか、非常に迷った。ボランティアに参加することのよさは十分感じている。でも手放しでおすすめできるような、そんな簡単なものではない、というのが持論だったので、私は間違えてZone Cに参加してしまったと思った。それでも恐る恐るグループ内のメンバーに私の考えを伝えると共感していただき、とても安心した。そして私の考えも変わってきた。何かの目的のために一時的に集まったボランティアであっても、そもそも様々な立場、様々な考えの人が交流し合う場ということに意味があるのだ。経験の長短があるからこそ、新たな考えが生まれ、持続可能なコミュニティになっていくのではないか。そう捉えた時に、あの少年の涙を見て怯んでいた私は、実はあのコミュニティに一石を投じられたのかもしれない。かつて私が参加していた少年院のボランティアは、全員が何年も継続して参加している人たちで、もう少年の扱いに慣れているような雰囲気だった。私が加入し「私のような心構えで本当に少年たちに接してよかったのか」不安な気持ちを吐露したことで、その場の雰囲気がさっと変わったことを覚えている。「そういう感覚、大事だよ」と同じボランティアのメンバーから返されたその言葉が、Zone Cへの参加で、点と点が線になったように感じた。

人は何らか環境を変えたいという思いは少なからずある。「変わりたい」という思いを抱えてもがき続けることもあるだろう。自分を変える突破口としてボランティアというものがあっても何もおかしくない、と思えるようになった。新たなコミュニティに自ら飛び込んでいくことがまずとても大切なことで、そこに参加することで自分を知り、相手を知り、社会を知るきっかけに繋がるのだろう。まさに「ナナメの関係」なのではないか。たとえ一方的な共感であったとしても、私のように、過去の経験を何度も捉え直し

ながら「共感」の意味を探り続ける。それはボランティアへの参加のように、自ら違う環境に置き、自分を外から眺めたり、内から見つめたりすることで一層捉え直しが促されるのではないかと考えた。

では本当の意味での共感になっていなくても、いつか相手に寄り添った共感になればよいのではないかと。そんなことを考えながら、もう一度少年院のボランティアに参加したいなどと、ふと思えた。

～つながりを生む対話の場～

福井大学国際地域学部 川上 怜華

私は大学の授業を通じて足羽福祉会様と連携しながら活動を行っており、その一環として今回のラウンドテーブル「Zone C コミュニティ」に参加しました。足羽福祉会の理事長である高村様から、足羽福祉会が取り組んでいる「足羽川ふれあいマラソン」について発表が行われると伺い、活動への理解を深めるために参加させていただきました。

実際にラウンドテーブルに参加してみると、予想していたよりも多くの方が参加されていて驚きました。また、年代も幅広く、中学生の方々から企業の方々までいろんな役職の方が参加されている印象でした。まず、足羽福祉会の理事長のお話を聞き、それからマラソン大会に参加した感想などを少人数のグループにわかれて話し合うという内容でした。個人的に大人数で話し合うよりも、少人数で話し合った方が一人一人の意見や感想を詳しく聞くことができるのでとても良い形式だと思いました。また、各グループに進行役がもともと決まっていたことで、効率的に話し合いを進めることができたと感じました。実際に自分のグループの方々のマラソン大会のボランティアに参加したきっかけ感想などを聞いてみると、いろんな理由でボランティアに参加していることがわかりました。そして今回のラウンドテーブルに参加し、さまざまな方のお話を伺う中で、マラソン大会が地域コミュニティにとって重要な役割を果たしていることを実感しました。マラソン大会は単なるスポーツイベントではなく、地域の人々が交流し、支え合う場となっています。特に、足羽福祉会が取り組む「足羽川ふれあいマラソン」は、福祉とスポーツ

を結びつけ、障がいの有無、年齢に関わらず多くの方が参加しやすい環境を整えている点が印象的でした。

また、足羽福祉会の皆さまのボランティアへの対応がとても素晴らしく、単に支援を受ける側としての姿勢ではなく、ボランティアに関わる人たちに對しても感謝の気持ちを持ち、積極的にコミュニケーションを取っていることがよくわかりました。この経験を通じて、ボランティア活動は「する側」だけでなく、「してもら側」の対応も重要であり、それによってより良い関係が築かれることを学びました。今回のラウンドテーブルを通じて、地域のつながりや支え合いの大切さを改めて感じることができ、とても有意義な時間となりました。

今回のラウンドテーブルを通して、このような場の重要性を強く感じました。普段関わることのない立場の人たちと意見を交わすことで、新たな視点を獲得ことができ、物事の捉え方が広がると実感しました。特に、地域イベントやボランティア活動に対する考え方は、人それぞれ異なりますが、こうした議論の場があることで、相互理解が深まり、より良い取り組みへとつなげられるのではないかと感じました。また、ラウンドテーブルでは単なる意見交換にとどまらず、新しいアイデアや協力関係が生まれる可能性もあります。今後もこのような場に積極的に参加し、自分自身の視野を広げるとともに、地域社会に貢献できる方法を考えていきたいです。

Zone D

Lesson Study Symposium Roundtable Discussion

Nalikule College of Education, Senior Lecturer/Head of Inclusive Education

Jeremiah Kampazangula Phiri

On February 22, 2025, the University of Fukui, Japan organised a symposium on Lesson Study presentations which involved Nalikule College of Education and Malikha Community Day Secondary School from Malawi as Symposiasts. The Symposium brought together educators from different countries of the world such as Malawi, Uganda, Egypt, Pakistan, Guatemala, United States of America, Mexico and Japan.

The Nalikule College of Education is engaged in lesson study activities in collaboration with its attached eight Community Day Secondary Schools such as Malikha Community Day Secondary School as one of them.

Three presenters shared insights on the implementation of Lesson Study in Malawi, focusing on key realisations, challenges, and ways to overcome them. Jeremiah Kampazangula Phiri presented the successes of Lesson Study and what the Nalikule College of Education is doing to ensure long-term sustainability. Josephy Elias Mbale shared how Malikha CDSS is thriving to overcome challenges in Lesson Study implementation. Frank Tamandani also added to the discussion on both the successes and obstacles when implementing Lesson Study in Physics lessons, providing a perspective on practical application.

Following the presentations, participants engaged in a lively roundtable discussion on the following three aspects: The first topic focused on successes and challenges. It was noted that due to lesson study, learners' academic achievement has tremendously enriched in all the attached Community Day Secondary Schools as compared to the past before Lesson Study was introduced. However, large classes and some resistance from certain teachers hinder lesson

study implementation in some cases. Secondly, the participants shared strategies for promoting teacher collaboration and peer feedback. It was noted that as lesson study activities appear on the schools' time table, which makes all teachers come together and get betrothed in lesson preparation, presentation, and conduct constructive post lesson feedback together. This makes them have improved content acquaintance. Lastly, they considered ways to improve learner engagement, based on the video lesson Study presentation by Frank Tamandani. It was noted that the teacher was just making a general check to see if learners were understanding the concept by asking them questions during teaching and learning process. On this, it was emphasised that the learners should produce individual reflection reports after the lesson.

In my opinion, the participants left the discussion with renewed enthusiasm for lesson study and a deeper understanding of its potential to enhance teaching and learning based on a few key takeaways. They discovered the importance of teacher collaboration and peer feedback in lesson study. They considered the need for teachers to work together to achieve successful lesson study. Teachers should ensure that each learner is following the lesson by specifically observing them individually and trying to identify those who are having challenges by raising their hands. Learners should also write a reflective report on the lesson after the teaching and learning process.

In general, student performance has improved in science subjects compared to before the introduction of lesson study. There is greater growth in teacher professional development because they are able to plan lessons and find

solutions to challenging topics together as they share skills.

Therefore, I would like to have more support in capacity building through training and skill sharing by the University of Fukui so I am able to share with other teachers in the attached CDSSs. I am always available and committed to ensuring an inclusively lesson study to benefit every learner regardless of any disability. At the moment, I am going to conduct action research to verify the findings of lesson study which may also require support for mobility and stationery. I hope that if given another chance to present, I will share the results with other participants.

In relation to the symposium, I recommend that for the symposium to be even more effective, the organizers should keep the following suggestions in mind: Presenters should be given a little more time to present their work. Participants could present their deeper findings after the Breakaway Sessions to share with all participants what might have transpired in their respective sessions as learning points.

I encourage others to join our Lesson Study community to share your experiences, ask questions, and learn from colleagues. Please feel free to contact us at Nalikule College of Education, Malawi at:

kampazangulaphirij@gmail.com to get involved.

University of Fukui Zone D International Roundtable: Key Takeaways

Gloria Christian Elementary School 1, Indonesia, Teacher, Mala Manurung

“Do what you can, with what you have, where you are.” This quote stated by the former US President Theodore Roosevelt reflected about my mixed feelings when I joined the Zone D International Roundtable. I was one of the DPDT students in 2016 to April 2017 and used to join the roundtable discussion at the University of Fukui. After about eight years from leaving Japan, I surely missed the environment of open-ended discussion and reflected back on what I have learned in the University of Fukui and what I have done at school in Indonesia.

The roundtable group has given me the opportunity to share and meet different educators and administrators from the Philippines, Trinidad, South Africa, Malaysia, Egypt, Malawi, and the USA. There were two takeaways that I want to share both as a participant and a presenter.

Firstly, as the participant of the first presenter, Shana from the USA, shared about the importance of new teacher mentorship. She reflected on her experience as an ALT teacher without receiving any mentorship in the early phase of her teaching. She explained that it is

very essential for new teachers to have mentors in public schools in Japan as part of their induction and mentorship into the system. I strongly agree with her statement of the importance of mentorship. There’s always a first time for everything, and this applies to teachers, no matter how experienced or inexperienced they are. Experienced teachers can serve as mentors for new teachers, as I think it will create mutual benefits. It can also serve as a basis for collaboration among teachers, and at the same time it will help remove the boundaries between senior and junior teachers. I believe the same collegial atmosphere will become the base of lesson study as well. One issue raised by the participant regarding mentorship is that the mentees or new teachers should have a willingness to be mentored by senior teachers.

Secondly, as the presenter. I discussed about the collaboration among the teachers in my school. At first, the teachers were working solely from each other, which was also reflected in the student’s work and in the minimal collaborative projects. However, the administrators created a

system to ensure that teachers should collaborate with other teacher from different subjects in the assessment program. Another way to collaborate is by having a teacher working group for each subject once every three months. One of the agendas is for each teacher to share their best practice. I used this opportunity to share one assessment that I did in my class which was different than what usually done as a project. The project involved conducting a Talk Show instead of only using a traditional form of presentation. I shared the process along with reflections from the students. By sharing this to my colleague, I hope it will become an alternative of students' assessment and also trigger from responses from other teachers about how they conduct assessments. I am expecting to gain some inspiration from my colleagues during the discussion on the meeting.

During the roundtable discussion, the issue raised was about what kind of support that

administrators should provide to facilitate teachers. One idea I proposed is that administrators have the privilege of observing all teaching and learning that occurs in the school. If they observe some good practices, they should ask the teachers to share in the working group with the administrators' feedback on why this assessment is considered as a best practice. I believe this will give teachers a sense of confidence that they are on the right path. On the other hand, it will also spark discussion among the teachers.

Finally, the two takeaways from the discussion became a reminder on what should I do as an educator. What I learned in University of Fukui 7.5 years ago still inspired me to what I currently do in Indonesia, my country. I believe if all educators have the principle "Do what you can, with what you have, where you are", it will pave the way for a better tomorrow."

Roundtable Conference at the University of Fukui: A Step Towards Inclusive and Holistic Education

University of Fukui, GPDT Student, **Aysha**

The morning air was incredible, and a light layer of snow covered the streets as educators, researchers, and professionals from around the world gathered at Fuzoku Compulsory Education School, a university-attached school of the University of Fukui. The excitement in the air was evident as the Roundtable Conference began on the 22nd and 23rd of February. Set against the peaceful backdrop of Fukui, this event became a place for sharing ideas, insights, and discussions on improving education for a more inclusive and well-rounded future. While many participants were physically present at the school, others joined virtually, making this a truly global gathering.

One of the most interesting parts of the conference was the poster presentation, where a presenter from Malaysia shared an interesting part of their education system: extracurricular

activities—including sports, music, and creative pursuits—make up 10% of the university admission criteria. This idea immediately caught my attention, and I couldn't help but think about my own school experience in Pakistan. Back then, extracurricular activities were often ignored, with the focus almost entirely on academics. I remember feeling physically and mentally tired after long hours of studying, with little time for activities that could help me relax or explore other skills. Now, as a teacher, I realize how important it is to balance academics with extracurricular activities. These activities help students develop essential skills such as teamwork, leadership, and resilience—things that textbooks alone cannot teach.

This idea was further strengthened during the Zone D online session, where a presenter shared a valuable lesson from Japan: "If you have a

hobby, take it seriously." It made me understand that hobbies, which are often seen as just something to pass the time, can actually shape careers and personal growth. Just like extracurricular activities are essential for building well-rounded individuals, hobbies allow students to explore their interests and even turn them into careers. In Pakistan, where extracurricular activities are often not given much attention, this idea offers a great chance to improve our education system by encouraging students to follow their passions seriously. This can help them prepare for many career paths and improve their well-being.

A particularly inspiring moment for me came on the second day of the conference when I learned about the "Huka Project: Sea. Sky. Child Project," an initiative to support students with special needs. What really stood out to me was the project's philosophy of not labelling their partner schools as "special needs" institutions but rather as "needs schools," which simply acknowledges that all students have unique needs. This subtle yet powerful shift in language felt deeply personal to me as I reflected on how students with disabilities have often been marginalized in Pakistan's education system. I recall my early years as an educator, where I witnessed students with special needs being placed in separate, isolated classes with limited resources. Rather than embracing their potential, the focus was often on what these students couldn't do.

The Huka Project's approach to inclusivity is a lesson I believe Pakistan's education system could really benefit from. No matter their abilities or challenges, every student should have the chance to succeed in a learning environment that helps them be independent and make their own decisions. This idea challenges us to stop using labels and focus on providing all students the support they need to do their best, just like any other student. For too long, special needs education in Pakistan has been separated and underfunded. This project is an excellent example of how we can empower all students, no matter their abilities, to live fulfilling, independent lives. It reminds us that true inclusivity is not just about providing support but also about recognizing and valuing each student's unique strengths.

The Roundtable Conference at the University of Fukui was more than just a gathering of people—it was a symbol of how education is changing. The discussions about extracurricular activities, the importance of hobbies, and the need for inclusive education showed how important it is to adopt a well-rounded approach to learning. As educators and policymakers look to the future, we must create education systems that go beyond textbooks and exams, encouraging creativity, inclusivity, and personal growth. The lessons from this conference will undoubtedly play an essential role in shaping educational practices that help students reach their full potential.

Zone E

学び続ける実践コミュニティとは

東京学芸大学附属高等学校学校 教諭 千葉 美奈子

今回の実践研究福井ラウンドテーブルでは Zone E のセッションに初めて参加した。昨年度福井大学教職大学院を修了し、約1年が過ぎた。今回の Zone E でのワークショップを振り返ることで、大学院での2年間の学びについて省察したい。

Zone E では「学びと教えのあたらしいすがたカタチをみんなで考える」ことを目的とし、今年「誰もが『居心地』の良い学校はつくれるか？」というテーマのもとワークショップが展開された。

ワークショップでは、普段の業務では会うことのない校種が違う先生方や中高校生と共にテーマについて話し合った。誰もが『居心地』の良い学校ってつくれるの？そもそも『居心地』って何だろう？それらの問いを学校の今と、これからを考えながら年齢や立場の違うもの同士が語り合った。居心地の良さという抽象的なテーマを経験も環境も多種多様な人たちと話し合うことにより、自分とは違う見方や価値を知り、そのことにより、また新たな問いが生まれた。誰もが居心地の良い学校にいたいと思うがそれはどのように可能なのか、そもそもそれは可能なのか。自分には教師として良い学校を作り上げたいという気持ちがあるが、そのために何が必要なのか、どうすれば良いのか。これらの新たな問いを、ワークショップが終わった今も自分に問うている。

また、運営とその組織を見ると、そこには学び続けるコミュニティが存在していた。運営は福井大学教育学部附属義務教育学校の中学生がテーマ決めから中心となって行い、数か月かけ教職大学院の職員と協働し今回のワークショップを作りあげてきた。当日の司会進行や全体のファシリテーションも中学生の彼らが行い、グループごと

の意見を共有していった。この運営組織が教職大学院1年目の夏の集中カンファレンスにて読んだエティエンヌ ウェンガーの『実践コミュニティ』における実践コミュニティとして機能しているものであった。

最終的にワークショップでは居心地の良い学校を作ることが可能かという問いを話し合うことで、テーマをグループ間だけでなく、ワークショップ参加者全員が協働し合っていた。どのグループがどのような意見を言うのか。それはどのように我々のグループと違って、どの観点が似ているのか。納得いく点ではグループのメンバーで目を合わせ、うなずきながら話を聞き入った。そこには互いに話を聞き合う、目的に向かって深く考える集団が成立していた。気が付けば、他のグループの意見に対する意見や疑問点を必死に考えていた。参加者は居心地の良い学校とは何かを対話を通して主体的に考えることによってコミュニティの一員となり、この実践コミュニティは数時間の間で新たな学び合うコミュニティとなったのだ。この話し合いの過程の中で参加者はコミュニティの一員となり、コミュニティが発展していったのではないだろうか。そしてそれは学び続ける集団であり、発展に向かう実践コミュニティそのものであったのではないだろうか。このコミュニティの一員になる実体験をしたことで改めて学び続けるコミュニティとはどのようなものかを再確認することとなった。

また、修了生としてこの Zone E のセッションを経験し、運営側にいた附属義務教育学校の中学生の学びの姿が教職大学院生の学修及び教師教育が反映されたものだと感じた。彼らの言動や姿勢から探究心を持ち、自律的に主体的に学び続ける意欲にあふれている様子が見られた。これはま

さしく子どもと教師の学びの相似形である。そして、教師の学びの在り方から見ると Zone E のワークショップは教員研修モデルの高度化として目指すべき姿であり、今後の教職について気づきを得ることができた。

今回ワークショップを通して考えたことを今振り返り書き記すことにより実践コミュニティの在り方、そして今後の教職への展望について発見することができた。このような省察する機会をいただき、この場をお借りしてお礼申し上げたい。

Zone F

インクルーシブとは何かを自問する

福井県立清水特別支援学校 教諭 原田 由香里

本校では、今年度より文科省のインクルーシブな学校運営モデル事業の指定を受け、学校全体で交流及び共同学習について深く考えている。しかしながら、インクルーシブとは何かという問いに対して、自分の考えが漠然としていて明確な答えは見出せていない。今回、問いの答え探しをしたいという思いから Zone F インクルーシブに参加した。

前半のシンポジウムでは、2名の先生方からの話題提供とコーディネーターの先生方のお話があった。

大阪府豊中市立南桜塚小学校 中田崇彦先生の話提供では、大阪の人権教育の歴史とともに積み上げてきた「ともに学び、ともに育つ」教育実践について知ることができた。特に印象的だったのは、個として自分がどうしたいのか(何を一人でやりたいか、何を手伝ってもらいたいか)を考え、集団として相手のために自分達には何ができるのかを考えるという、子どもたちの双方向からの思いをもとにした交流の姿である。その姿一つ一つに、「ともに学び、ともに育つ」教育の積み重なりが表れており、素晴らしかった。さらに一人ひとりの子どもを多くの指導者で見つめていく共同指導体制の紹介があった。教員の学びは児童生徒の学びの相似形と言われているが、まさに教員同士の協働の姿が、南桜塚小学校全体の「ともに学び、ともに育つ」教育を支えていると感じた。

福井大学教育学部附属特別支援学校 岩佐成樹先生の話提供では、自己理解と自己受容をテーマに自己肯定感を構成する6つの感(自尊感情・自己受容感・自己効力感・自己信頼感・自己決定感・自己有用

感)についてのお話があった。子どもマップをもとに、挑戦→成功体験→自信へとつなげていく丁寧な支援が印象的だった。個々の「自分も周りも大切にしようとする気持ち」「今を充実させたい気持ち」がインクルーシブな社会へと広がっていくというまとめのお話から、附属特別支援学校には、お子さん一人ひとりを丁寧に見取り、成長に寄り添いながら見守る支援体制があると感じた。同じ福井県の特別支援学校教員として、自分自身や本校の支援体制を見つめ直し、自分に何ができるかを考え見つけていきたい。

コーディネーターの福井大学連合教職大学院 廣澤愛子先生のお話では、様々なコミュニティにおいて、創造し、試行錯誤し、うまくいったときの喜びを得ることが、共生社会を築く上での基盤になるというお話が特に印象的だった。お話を聞きながら、自分自身の中にあっただもやもやが言語化され整理されていくような不思議な感覚を覚えた。これから自分の中で再言語化し、周りの先生方に自分の言葉で伝えることができるように整理するとともに、今後の取り組みに活かしていきたい。

後半は、クロスセッションが行われた。

クロスセッションは、県内外の先生方といろいろな情報交換ができる貴重な機会である。自己紹介、自身の取り組みや悩みなどを共有しながら、こんなこともあった、あんなこともあった、こうなんじゃないか、こうしたらどうだろう、など、ざっくばらんに語り合う中で得られることはとても多い。悩みの内容は違っても、試行錯誤して挑戦している先生方のパワーがシャワーのように降ってきて、明日への活力

や自身の取り組みへのヒントをたくさん得ることができた。

全体を通して、改めてインクルーシブとは何かを自問する。インクルーシブという大きな集合体をイメージしたとき、その集合体を構成している部分部分には、大なり小なり、日々の教育活動の全てが含まれているのではないだろうか」と回答する。私の頭の

中に蓄積してきた様々な実践や語り合いを踏まえると、教育活動全てがインクルーシブとつながっており、どれが欠けてもインクルーシブは成立しない。結局インクルーシブの和訳「包括的な、すべてを包み込む」に戻ってきた感が否めず、苦笑いしながらこの原稿を書いているのだが、創造し、試行錯誤し、問いへの自分なりの回答を導き出していくその過程は自分にとって価値のある時間だった。

Zone F 「個」に寄り添うために

和田こども園 園長 嵩谷 浩太郎

「私たちはみなそれぞれがユニークな存在であり、多様性を彩る一員である」「全ての子どもがあるがままの存在として生き、育つことのできる教育」「一人ひとりの子どもの世界を知ろうとするまなざしを持つ」など、素敵で主眼文に惹かれて Zone F に参加させて頂いた。当園においても、子どもたち一人ひとりに寄り添うことを大切にしながらも、限られた担任でクラス運営をしなければならない現実に葛藤を抱えている。

始めに、豊中市立南桜塚小学校の中田先生のお話を聴かせて頂いた。オーダーメイドで一人ひとりと合意形成をしながら決めていく合理的配慮を大切にしている南桜塚小学校では、一人ひとりの子どもを多くの指導者で見つめ、その子どもの良さを伸ばしていく指導を行っている。「すべての子どもの担当は、すべての教職員である」と掲げ、学校や子どもの問題や課題はすべての教職員で考えるようにしている。そして、自走ができない車いす生活の生徒が運動会のリレーに参加する実践例でも、合理的配慮を子どもも教員もみんなで考えている。膝をついて手で体を支えてソファの座面を横歩きすることを1年かけて練習してきた生徒の願いから、ソファの座面を平均台に換えて挑戦する場面をリレーに取り入れて、その生徒の願いを実現していた。

次に福井大学教育学部附属特別支援学校の岩佐先生から、強みと弱みを知る自己理解からスタートし

て、弱みのある自分も受け入れていくことが自己肯定感を高めていくことにつながるという実践を聴かせて頂いた。令和4年度は、まずは自信を持って取り組める作業を作り、「できる」実感によりやりがいを持ってもらう。そして、その作業を通じて仲間や外部とつながり、成功体験や安心感を得ることで自尊感情が高まっていく。令和5年度は、自信を持つことが出来た作業を続けたい生徒の思いと新しい環境に踏み出し、一段階ステップアップさせたい教員の思いに葛藤があった。その時も教員みんなで話し合い、生徒と思いのすり合わせをされている。話題提供後のクロスセッションでも、立場の違うメンバー構成であったが、子どもの主体性と教職員の願いのバランスが難しいという共通の課題につながった。

シンポジウムのまとめでは、福井大学連合教職大学院の廣澤先生が、2つの話題提供の共通点として「コミュニティという基盤が前提」「コミュニティの安全・安心」「教職員の協働・連携」を挙げられた。そして、教育現場におけるインクルージョンの基盤になるものとして「競争より協働」「効率性より創造性」「子どもの自己肯定感を損なわない教育の実現」の3つが見て取れたとして、締めくくられた。

子に寄り添うためには、私たち教職員が何事にも対話の場を設けて一緒に考える関係性を構築して、協働・連携するコミュニティを作っていくことが大事であることを再認識させて頂く機会となった。

感覚が裏付けられる豊かな「気づき」

福島県教育委員会 指導主事 佐々木 理恵

本県教育委員会の指導主事等とともに、実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring sessions に初めて参加した。日々多様な実践を行う中で、教育におけるインクルージョンについて考える機会が多く、今後の実践のヒントになればと Zone F インクルーシブ「『個』の視点から教育を再考する - 育ち合う子どもたちとコミュニティ -」を選択した。

「ともに学び、ともに育つ」教育を進めてきた大阪府。自らも障がいと向き合いながら教壇に立つ豊中市立南桜塚小学校の中田崇彦先生は、共同指導体制による「育ち合い」の関係づくりの中に、自然なインクルージョンが生まれるプロセスを報告された。「個」の課題・支援はすべての教職員で考える、その姿を見て、周りの子どもたちが自然とサポートの仕方を学び、実践する。まさに、「育ち合い」がそこにあると感じた。

福井大学教育学部附属特別支援学校の岩佐成樹先生は、生徒が様々な活動や人との関わりを通して自己理解を深めて自己受容し、成長していく過程を協働的に支えるプロセスを報告された。自己肯定感を育む土台としての自己理解の深化には、他者との「係わり」が欠かせない。学校というコミュニティの意義を考えさせられた。

両発表は、「個」に焦点をあてつつも、実は自然と学びあう集団形成の実践でもあった。福井大学廣澤愛子先生の視座により、安心・安全かつ教職員が協働・連携するコミュニティとしての「学校」が、教育

現場でのインクルージョンの基盤になるという気づきをいただいた。「特別な支援」に限らない、多様な教育的ニーズを抱える子どもたちを支援する基盤である「学校」を「育ちあう」組織にしていく必要性を痛感した。

その後行われた小グループでの対話の時間。何度もはっとさせられた。学校というコミュニティにおいて、個別支援と集団指導は時に両立困難ともなる。それでも、教職員も子どもも協働的に「学びあう・育ち合う」ことによって「個」を支援することも個別支援であるとの気づきは、個別最適な学びと協働的な学びが二項対立ではないことと同義に思われた。これまでの感覚としての理解が、対話を通して実に「腑に落ちた」のである。

迎えた二日目のクロスセッションは豊かな語りと傾聴、そして省察の時間となった。昨日の気づきはこの日の対話における自身の視座を高めてくれた。より言語化した資料を持参すればよかったとの悔いもある中、これまで出会った生徒たちを思い浮かべながら、ただ語った。最後に、「先生がそのように実践を重ねようとするのはどのような思いからですか」と問われた。しばしの沈黙後、自然と言葉を紡いだ自分に驚いた。

「エンパシーを大切にしているのだと思います。」

福井での多くの「気づき」は決してゴールではなく、新たな実践へのモチベーションとなる。さあ、再実践へ。



長期実践報告会感想

みんなで作る

学校改革マネジメントコース2年/袖ヶ浦市立長浦小学校 犬塚 晶子

2月上旬、今年も長期実践報告会が行われた。昨年は、M1ということもあり大きな目的意識もなく参加したが、今年は、2つの目的意識を持って参加をした。

1つ目は、仲間の院生さんたちの良い実践報告を聞き、自分の今後の教育活動に生かしたい。

2つ目は、自分の長期実践報告をみなさんに見ていただき、良いものにしたい。

特に、私はタイトルが良いものが見つからず報告会でみなさんに今のタイトルがどうであるか感想を伺い、考えていこうと思っていた。

報告会が始まり、まずはストレートマスターの方からの発表だった。長期インターンとして高校生と関わり、報告ではたくさんのパワーワードを聴き、素晴らしいと感じた。自分の目で授業での様子、ワークシート、学校行事の様子からたくさん見取りをし、生徒の実態をつかみ、常に生徒を主語に考えていく実践を聞いていると何か胸が熱くなった。自分の生い立ちからの教師観と、自分が実際になってみての教師観の違いに悩みながらも、生徒ともに成長していく姿に、素晴らしさを感じた。発表の中に「信頼」という言葉があり、「生徒を信頼する」と何度か繰り返し言っていた。発表にのめり込んで聞いていた私は、自分の目の前の児童や若手の先生がたを「信頼」しているだろうか？と、言う言葉が浮かんだ。多忙とか子どもの安心安全などばかり考え、思い切って任せていただろうかと、不安になった。20代前半のストレートマスターインターン生という立場で、これだけ本気になれる教師がいることに、自分自身が反省するとともに、「日本の教育はまだ大丈夫」と、うれしい気持ちになった。

この発表の中で、孔子の言葉「五十にして天命を知る」という言葉も出てきた。私は、天命が理解できているだろうかと不安になった。私にとっての「天命」とは……自分を問い直す言葉が、心に刺さった。

私の発表で、ファシリテーターの先生含め5名の先生方よりたくさんのアドバイスをいただいた。自分には気づけなかった、私のキャリア形成について客観的な視点で感じたことをお話しいただいた。勤務校の課題や、教育活動の中での喜びなど共感していただいた。

長期実践報告について、大学院に入りたての頃は、「修論」というイメージが強く、基礎研究から調査研究を行い考察するという流れで、長期実践報告が作成されると思っていた。しかし、そうではなく自分の実践を語るように綴り、長期の実践記録から省察をしてまた更に実践をする。この往還を繰り返し最適な教育実践を見つけていくものであるとわかり、自分にできるかと不安になることもあった。長期実践報告を書くということは、今までの自分を振り返り、その時の気持ちを思い起こし、そして過去の自分を、現在の自分が省察する。過去に、今の自分の意思決定の素地がある事を確認し、前進していく原動力にする。また、それを読んでくれた人が、自分の経験や体験と重ね合わせ、思いを巡らせ、違った角度や視点から、考えていく。自分一人の往還ではなく、校種や立場を超えた多様な考えに触れ、教師自身が視野を広げ、子どもの学びに伴走していく。日々の勤務校での実践と結びつけ、更に良いものにしていく。この2年間のカンファレンス、ラウンドテーブル、夏期・冬期集中Cycle、長期実践報告会などで、一人ではない「みんなで作る」学びの中でたくさんのパワーワードをもらい、自分の実践が変化していくことが実感できた。じっくりと時間をかけた「対話」こそ、学びの原点である感じている。

福井の学びは、他人事でなく自分事として考え、「みんなで作る」、孤独にしないあたたかみがある。このあたたかみがあるからこそ、2年間学び続けることができた。「私の長期実践報告」ではなく「福井大学教職大学院みんなで作る長期実践報告」となったことに、感謝である。作成途中に何度も、担当の先生方が、相談、ご指導とたくさん私と関わってくだ

さった。率直な意見もたくさんいただき、そのたびにやる気になった。

4月から、2年間の学びを元に、更に新しい実践を展開していく。不安と、これから出会う子どもや同

僚の先生方とどのような学びが待ってるのか、楽しみである。福井大学教職大学院の先生方、東京サテライト、福井の院生みなさん、本当にありがとうございました。

自分と対話する

学校改革マネジメントコース2年／福井市明倫中学校 三上 勝

長期実践研究報告を書き終え、2月2日の長期実践研究報告会にて2年間の自分の学びを報告しました。私は、不思議と楽しみながら長期実践研究報告を執筆することができました。その過程を簡単にまとめると以下ようになります(今後、長期実践研究報告を執筆される皆様の参考になればありがたいです)。

1年目の夏期集中講座で大まかな執筆内容を考えました。そして、この年に実践してきたことをその都度まとめていき、冬期集中講座で整理して、2月のラウンドテーブルにて発表しました。最後に、発表したことをもとに1年間の実践のまとめをしました。

異動により勤務校が変わった2年目は、今年、実践していくことを考え、実践し、まとめ、7月のラウンドテーブルで発表しました。この年の夏期集中講座では、これまでの自分を振り返り、まとめていきました。その後も、実践をしたことをまとめ、記録していきました。そして、冬期集中講座では教職大学院での学びやこれからの展望についてまとめ、長期実践研究報告の執筆を終えることとなりました。

さて、私が楽しみながら長期実践研究報告を執筆することができたのは、「自分と対話」しながら執筆していたからだと思います。過去の自分の実践やこの2年間で自分が取り組んだ実践、これからの自分

の展望を書き記しながら、常に「自分と対話」していました。

これまでの過去との対話では、「あの時の自分は、〇〇な想いで実践していたけれど、今振り返ってみると、××のような意図があったのではないか。」などのように、時空を超えた対話をすることができました。そして、その対話から過去の自分の実践を今の自分が捉え直すことができました。

また、この2年間の「自分との対話」は、常に実践しながら自分と対話する「行動の中の省察」と実践後に自分と対話する「行動の省察」の連続でした。その省察から多様な価値を見出すことができました。

そして、これらの過去・現在の自分との対話から、今後の自分の展望を考えることができました。このように私は「自分と対話」することで、長期実践研究報告を完成することができました。

私は、2年間の福井大学連合教職大学院で多くのことを学ぶことができました。その学びは、月間カンファレンスや夏期集中講座、冬期集中講座、ラウンドテーブルなどでの「他者との対話」からの学びと、長期実践研究報告の執筆での「自分との対話」からの学びです。つまり、この2年間私は「対話」から多くのことを学ぶことができました。この学んだことをもとに、これからも様々な人たちと「対話」して、自分の学びをアップデートしていきたいと思います。

長期の実践からの育ちを語る/聞く

学校経営マネジメントコース M2/西原町教育員会 前 幸三

参加者: 渡辺 昇希 附属義務後期 中野 晃宏 岡谷市立岡谷北部中学校
 岡本 敏明 埼玉県立小川高等学校 細川 和孝 福井県立若狭東高等学校
 ファシリテータ 寺田 光宏

令和7年2月2日に実施された長期実践研究報告会において私たちのブレイクルームでは、私と附属義務後期の渡辺昇希先生と2人が発表者となった。

渡辺先生のテーマは、「描き続ける教師としての私」でキーワードが「見取り 授業 理科 協働 省察」であった。

渡辺先生は、高校で教壇に立たれた経験と先輩からの助言をもとに取り組みされた自らの歩みを報告されていた。「なぜ、指導案が必要なのか。板書をする意味は何か。」等疑問に思われたことを率直に語られていた。私の経験から以前の学校では、公開授業や研究授業で指導案の細案を作成して授業実践を行うことが常であったと思う。その作成の過程で、教材観や指導観、生徒観、評価場面、話し合いで活用する思考ツールの選択、活用など授業を想定しながら指導や評価の腕を磨いてきた。しかし、最近では、働き方改革としての関係もあるせいなのか指導案を略案でよしとしたり、記述内容も単元名と指導面で工夫や「めあて」などとしたりなど簡略化する場面が増えたように感じる。このことが少なからず指導案の意義を捉えにくくしているものと思われる。

渡辺先生は、先輩の助言を実践に移していた。報告書の第一部は、「見取り」についての助言を受けてからの実践の紹介であった。先輩の助言の一つが生徒の学びをどのように見取るかということであった。生徒の学びの見取り方で大事な事としては、生徒の声を聞くこと、しっかり記録を取ること、困った表情をしている生徒に声をかけることなどである。先輩や指導教官の先生に言われた事はとりあえずやってみる姿勢がとても好感を持てた。それと何事にもなぜそれをやる必要があるのかその意味や意義を考えて実践することにはっと気づかされたことがある。

私は、経験を積む中で多くのことを当たり前と感じ、業務を作業の様にしていたのではないかと改めて疑問を持つことが成長にもつながると感じた。

渡辺先生は、次の見取りのステージとして休み時間の生徒の過ごし方に触れられていた。授業時間以外の休み時間や放課後の友人関係や行動を見る。そして生徒理解に努めその生徒がとっている発言や態度の背景にある理由を探ろうとしている。その「生徒の背景を知る」という言葉が何度も渡辺先生の口から発せられ。本気でその生徒を知った上での授業展開をしようとする姿勢は、私にとって学ぶべき姿勢であると感じた。また、3年生を担当し、創作劇を通して生徒の学びの姿を通して生徒理解や生徒との関わり方を学んだようであった。

第二部は教材研究である。最初「指導案とは何ですか。まともに作成したことがない。教材研究って何をするの。」ということにも疑問を抱いたようだ。報告後の聞き手の先生方からは、当たり前と思っていたことに対して疑問を持てることが素晴らしいという感想も述べられていた。

その後の渡辺先生の本人の気づきのコメントが素晴らしいと思った。それは、「指導案を書いたことがないので、自分で授業をデザインができない。」という言葉であった。渡辺先生は、ご自身の指導案がないと不便だという実体験を通して指導案や教材研究の大切さを感じられていた。この授業を通して何を学ぶのか、ただ事象を教えているだけではないか。授業の軸とは何かとすることを考えたそうである。そして、予備実験をして生徒がどのような学びになるかを考えるか考慮して導入を考えたということがあった。

また、「なぜ板書をするのか、なぜワークシートをするのか」ということも意味を深く考えずにやっていたそうである

指導法については、生徒の声としてでてきた「勉強は塾でもできる。実験など学校でしかできないことをやりたい。」との意見を聞いて実験の授業に尚一層やりがいを感じているということであった。

中野先生からは、先生の軸と生徒の軸、その軸を置き換えながら、教材研究で学ぶ本質を生徒と共に作って欲しいという話を聞いての発言があった。授業で学ぶ単元の意義意味を子どもたちを軸として学び取らせる工夫が大事なのではとも話されていた。

細川先生からは、理科の実験の反省として素材選を失敗したということもあったが、失敗を想定した準備も必要だと思う。生徒のことやどのような授業展開になったとしてもリカバリーできるような実験器具や素材の準備をするとよいのではないかとという提案があった。

岡本先生からは、渡辺先生が本時の授業だけではなく、生徒の将来を意識する授業したということがとても印象に残った発言された。岡本先生もご自身を振り返り管理職として学校の姿をしっかり共有すべきだと言うことをお話しされていた。教師としての軸も必要なので、教師の軸を大事にする場面と生徒の軸を大事にする場面を行ったり来たりすることが大事だと思う。

私の感想としては、渡辺先生が軸という言葉は何度もお話しされていたので、自分の軸なのか相手の軸なのか教科の軸なのか場面場面で意識的に設定することが大切だと思った。軸をどこに置くか、意義や意味を試行錯誤しながら考えていくことが大切だと思う。実際、渡辺先生は、自らも疑問を持ちながら物事を見ており、その自らの疑問を通して授業観の転換を図ろうとしている先生の姿勢は私も学ぶべき点だと思えた。

私の長期実践報告は、テーマを「共感に伴う省察による教師としての育ち」とした。これまでの体験より上手くいくときや長続きしない時の両方を比較すると第一に共感が持てるかどうかが大きく作用していると考えた。また、多くの先生方の語りで説得力があるのは、その先生自身の実体験での気づきがある。そこで、私自身のこれまでの育ちを通して共感を得られた事例を報告書にまとめた。長期実践記録ということで私自身の幼少から学びに関する意識の変化や関わって頂いた生徒、先輩、保護者を含む関係者から多くの学びの機会と叱咤激励を受け今の私があることを改めて感じる事ができた。その思いを今回報告させて頂いた。

渡辺先生からは、「宜野湾中憲法」の質問があった。「生徒が自主的に学校生活のルールを作成しようとはなかなか発想できないけどどのようになさったのか。」との質問であった。私は、何か学校で課題がある時は、まずは、生徒に委ね考えさせた。そうすると生徒が自分たちで考え、自分たちでできる解決策を考えてくる。解決できなければ、次の策を考えさせる。」と回答した。

岡本先生からは、私の次の言葉にご自身の学校経営にも通じるものがあると話された。「教師の発言が自分たちのやりたいこと、やるべきことが何かを話しているのか、それとも学校のある地域や施設設備のせいになっているのか。先生方の口癖で、学校の状況を把握できる。」という言葉である。また、どうしても協力的でない先生には、どう対応されてきたかという質問があった。私は、「人それぞれ、強み・良さがある。その強みに合う場所を学校経営の中に探す。学校教育目標に向け役割をその先生と相談して作っていく。」と回答した。

中野先生からは、「やる気の出せない先生やどうしてもできない先生、学校の方針についていけない先生の対応をどのようにするか。」という質問があった。私は、「みんなができる方が怖い。みんなできなくてあたり前。みんなができるように工夫をする。や

り方は、手段なので特にこだわりはなく、目的を達成できるように共感を得ながら調整していくことが大切だと感じているし、そうしたやり方が明るい学校風土になっていくと思う。」と回答した。今回も対話を通して実践の価値や改善箇所を振り返る等の省察を行うことができた。

最後に、いつの間にか福井大学大学院の2年間で過ぎようとしている。私自身を振り返ると話すことの多かった自分から相手の話を聞くことが多くなった自分へと変化してきている。業務をこなしながら

のカンファレンスやラウンドテーブルなど忙しい中でも学び続けることの大切さを学んだ2年間でもあった。清川先生や福島先生をはじめ平沢先生、前田先生には大変お世話になった。長期実践報告書は、勤務しながらの執筆で思い通りの仕上げにはなっていないのが心残りである。これからも福井大学で学んだ「記録と対話」を意識して業務に励みたい。学びの場を提供していただいた板橋区役所の関係者、共に学んだ院生のみなさん、学びの機会を支えていただいた職場、家族に感謝する。

Balancing Act

ミドルリーダー養成コース M2, Shana Wolff (シヤナ・ウォルフ)

On February 2nd, students and teachers came together in person and online to present our long-term practice records, ask questions, give comments, and make associations with our own practice. I and another second-year student presented our reports online to an international audience of listeners. Our records have some similar themes based on a shared teaching history, and while there are differences in research topics and approaches, key themes became apparent over the course of the event.

Both presenters share similar career experiences, to some extent. English is a mandatory subject for students in Japan beginning in elementary school. Typically, part of these courses involves a native speaker of English visiting classes to assist in language learning. The other presenter in my group, Nikki Hartford, and I both came to Japan to fill this role as assistant language teachers (ALTs), working collaboratively with career English teachers in the Japanese school system (JTEs). The listeners in our group consisted of ALTs as well as international teachers from a variety of backgrounds. Many of the group members shared similar experiences described in both

reports, making the discussion specific to the English teaching and ALT experience.

An area of common difficulty is how to judge the proficiency of a speaker. In many ways grading systems are not sufficient in indicating how “good” a student’s English is, or defining what makes a “good” English speaker. It is not uncommon for students who speak English with confidence and show high levels of communication in classroom contexts to receive low scores on tests: responses that are creative or daring in expressing complex ideas may score low marks because of minor grammatical errors, which are especially common when language learners tackle relatively new topics in their target language. The inverse is also represented in our classes, where students hesitant to speak and unable to communicate smoothly in conversation with teachers test well because they stick to a tight script they have found to be “simple acceptable answers” that might not be honest to their true feelings or experiences.

Our worry is the way in which this system of evaluation discourages of students from using English effectively in real-world contexts.

Students will insist they are not a “good” English speaker based on the fact that they do not test well, despite being very receptive to communication. Students that test well never gain true confidence because they are fearful to leave the predetermined script. This is the result of trying to evaluate language learning in the same way as other subjects such as mathematics which often have clear binary correct or incorrect answers, a process we have referred to as “mathification”: small errors that do not impede communication but are technically incorrect grammar can have a huge effect on grades. Language has a larger error bar than quantitative fields: despite errors being present a speaker can still be understood within reason. As teachers we want to work towards finding a grading solution that allows for students to make mistakes and grow from them rather than punish them for any mistake.

Additionally, we addressed the topic of work-life balance for teachers. Often teachers assume larger roles in students’ and other teachers’ lives than what is originally described within the position. Our group agreed that supporting others such as students and coworkers is important, but also echoed concerns about a sense of giving and

not setting boundaries for ourselves of where the giving of one’s own time should stop.

In a Japanese school, it is not uncommon for Japanese teachers to arrive an hour or more before class begins, some even working at home in the early hours of the morning before coming to school. These teachers also often stay late into the evening. This dedication is not lost on ALTs, and some of us sacrifice our private time to log longer hours at the school too, feeling a sense of obligation. However, ALTs do not have the long-term job security, bonuses, or additional retirement plans career Japanese teachers typically do, and the value of working “above and beyond” is difficult to estimate. As important as our job is to us, as a Japanese teacher or a foreign teacher working in the school system, we need to remember to make time to balance our private lives and personal time.

By modeling healthy work-life balances for our students, and finding time to care about ourselves, we set a good model for how our students can better navigate a fulfilling adult life. Valuing the agency of students and their unique life goals is an important part of continuing educational improvement and development.

視野が変わる、世界が変わる

授業研究・教職専門性開発コース 2年/岐阜聖徳学園大学附属小学校 **松河 圭亮**

2月2日、2024年度の長期実践報告が行われ、80分の発表を終えることができた。長期実践報告書を3日前の1月31日に書き終えたばかりで、一息つく暇もなかったが、自身が長期インターンシップで変容したこと、軸となることを語る事ができた。

長期インターンシップに勤しんだ2年間、私にとっては非常に良い経験であったと考える。というのも、長期実践報告書を執筆するに当たり、自信の変容に気づき、そこから自信の軸となる「予見する」ということを見出すことができたからだ。ただ、この2年間という長い時間をまとめるのは骨が折れた。そもそも、本格的に執筆し始めたのは、12月の冬期集中講座である。それまでは、テーマや目次、ページ数が

どれほどになるかなど、長期実践報告書の構成について吟味していた。そして、2回目の冬期集中講座に向けて、改めて執筆の続きを始めようとした矢先、大晦日に39度超えの熱が出て、翌日の元旦、インフルエンザA型という診断をいただいた。そして、高熱により脳細胞が破壊されたまま、1月の冬期集中講座に臨むことになった。その時点で書き上げたのは全体の6割ほどであり、私は焦りを覚えた。そして、長期インターンシップも始まり、空き時間を見つけては、執筆する生活を過ごすことになる。そして、書き終えたのは前述したとおり、1月30日。まさにギリギリであった。ページ数はそこまで多くはないが、私が2年間、インターンシップに臨んだ記録として残すことができた。執筆し終えた今は、すがすがしい

気持ちである。大変であったが、自身の学びの変容を見出す上では必要な作業であったと考える。

さて、長期実践報告書執筆の苦労話はさておき、タイトルである「視野が広がる、世界が変わる」に迫ろうと思う。今回の Newsletter を執筆上で、真っ先に思いついたのが本タイトルである。

長期実践報告会にて、私の発表を聞いて下さったある先生から、「役があるから視野が変わる、視野が変わると世界が変わる」というコメントをいただいた。変容とはまさに、見方の違いによって引き起こされるのだろうと考えた。この2年で私の立場は、インターン生から非常勤講師へと変化した。その結果、子どもや授業の見方がより教師目線となり、また、子どもとの関わり方も教師らしくなった。同じ学校、同じ教室、同じ子どもたちを見ているのに、それを見ている私の立場が変わったことで、見え方が変容した。

『授業研究—実践を変え、理論を革新する』(木村優・岸野麻衣, 2019)にも授業の見方としてレンズの話ある。授業の見方は、教師が何に重きを置くかで変わり、その授業で何を見たいか(レンズ)が異なるから、授業の見方は十人十色で千差万別だそうだ。私の実践としても、立場が変わることで、レンズが変容したのだろう。そんなことを考えさせられる長期実践報告会であった。

今年度をもって私は福井大学連合教職大学院を修了する。この2年で私は学校という現場に深く入ることができた。そのおかげで、自身の変容を見取ることができた。この学びの日々を一言で表すなら「Changing of my world」となると考える。そして、今後も教員として働いていく中で私の見える世界は変わっていく。

長期実践報告会を終えて

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/勝山市立成器南小学校 齋藤 英市

長期実践報告会が行われた。私は長期実践の報告者だった。私のグループでは、同じく報告者が一人おられ、聞き手が二人、ファシリテーターの先生がお一人といったメンバー構成だった。つい先日提出した長期実践を互いに報告し合い、聞き手の皆さんに語る、そこからみんなで価値づけする。一人あたりの報告時間は長いんだけど、あつという間に感じられた。それほど、この時間がとても充実していたからだろうなあ、と思った。

「お疲れ様でした！」と、同じグループではなかったけれど、これまでのカンファレンスで一緒させていただいた院生の先生からも声をかけていただいた。ああ、教職大学院でともに歩んでくることができたからだなあ、と嬉しくなった。

報告会では、院生さんの実践を聞きながら、この教職大学院で学んできた日々の中で、見取りについての捉え方や、子ども観、授業観、ジェンダー観などが変わってきたことを知ることができた。「ああ、そうだなあ」、と私自身にも共感できるところが数多くあった。よく、大学院の先生が「これまでのレポートを

実践に使っても、その時の自分と今の自分は違っているから、そのまま使用することはやめた方がいい」とおっしゃられたことがあったことを思い出す。今は「確かにそうだな」としみじみ思う。その頃は、「そうかなあ」と半信半疑なところもあったが、自分が長期実践を書き上げていく途中で、自分の様々な教育への捉え方が変容してきていることをはっきり感じることができたし、実践を聞きながら、「みなさんも同じく観が変わっているんだなあ」とより強く感じることができた。そうやって、感じたことをみんなで語り合う時間は、とても意義があると思う。

「このようにまとめ上げる取り組みってどう思う？」ファシリテーターの先生が私たちに問われた。「大変なことだったけれど、やってよかった。やった方がいい。」と同じグループだった院生の方が答えた。私も同感だった。確かにこれまでの実践を振り返ってまとめ上げる作業は大変だった。職場でのいろいろな仕事をこなした上での、プラスアルファの作業だからだ。だけど、この長期実践に取り組むって、本当に意味のあることだと感じた。そもそも、こういった

取り組みをしなければ、自分自身がどんな歩みをしてきたか、どんなことを大切にしながら今に至ってきたのか振り返る機会などそうそうない。だけど、こうやって取り組むことで、今の自分に、今の学校での取り組みに繋がっているのは、あの頃の出来事がきっかけだったり、あの頃の誰かの言葉だったりすることを確認することができ、どんなことを大切にしていたのかを改めて気づくことができたからだ。そして、これまでの取り組みを振り返ることで、自分自身、その時その時をいろんな方に支えられながらがんばってきたんだなあ・・・、と自分を認めてあげたくなったりもしたからだ。それだけではない。これから先、わたしが目指していきたいもの、つなげていき

いことをカタチにすることで、よりこの先のビジョンをクリアにすることができるからだ。つまり、この長期実践は、私自身のこれまでの、そして、これからのコンパスになっていくんだろうな、と思える。それはきっと長期実践を書かれている皆さんにとっても同じなのだろう。

そうやっていろいろな価値を見出せた時間をともに共有できた報告会は、本当にいい時間だったと改めて思えた。たくさんの思いや気づきを語り合いながら共有できるって、いいなあ・・・。いい時間をありがとうございました、と心から拍手！

実践報告を拝聴して

学校改革マネジメントコース 1年/福井市社北小学校 松並 千尋

今回の報告会にあたって、2人の修了生の実践報告を読ませていただきました。来年度、自分が執筆するイメージがわくと同時に、これだけの分量を書くことができるのだろうか、身が引き締まる思いになりました。

カリタス女子中学高等学校の高橋美幡先生の実践報告は、生徒との関わりを主にして感じ取ったことを中心に書かれていました。高橋先生は、生徒にとって図書館とはどのようなところであるべきかという、学校図書館の立ち位置を模索して、行事やイベントの企画・運営に注力していましたが、最終的には、図書館がどういうものかは生徒が決めると考えていました。東京栄養食糧専門学校の金澤敏文先生の実践報告では、自身が勤務する専門学校を改革するプロセスを報告していました。組織の問題点を洗い出し、改革のための様々な実践が丁寧に描かれていました。

二人の先生の報告は、今年度の自分の実践を振り返るきっかけとなりました。

今年度、私は、研究主任として、教員による個人研究や校内研修「語ろっさ」の企画に取り組んできました。ただ、それらが先生たちにとって、気づきや学びが得られるものになっていたのだろうか、と改めて

思います。今年度初めのカンファレンスで、「組織は人だ」と自分が話したこの言葉をいつの間にか忘れてしまい、実践をこなすことばかりになってしまっていたように感じます。金澤先生は、職場同士の人間関係や職員の人間性を巧みに捉え、プロジェクトを若い先生に任せるなど改革をプロデュースしていました。相手を見取り、どのように働きかけていくとよいか考えていくことを日々の忙しさからできずに終わってしまったことを反省しました。先生たちの強みを生かすという視点を忘れず、持続可能な組織づくりに携わりたいと思いました。

また、高橋先生は、生徒に伴走する立ち位置を大切にしていました。金澤先生は、自身の強みをうまく生かして、先生同士をつなぐ役目を果たしていました。「しかけ」をしていく自分自身も、自分を知ることが必要だと思います。来年度、新しい先生を迎え、新たな組織が生まれますが、中堅という自分の役割を再認識し、自分が組織にできることは何かを考えていかなければならないと思いました。

最後になりますが、このような省察の機会をいただいた2人の先生、そして今年度執筆を終えた先生方に大変感謝いたします。ありがとうございました。



事務連絡

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。



【編集後記】2024年度は58名が教職大学院を修了しました。そして、2025年度は63名の新たな院生を迎え、新たな学びのサイクルに移行していきます。今年度のNewsletterも皆様の寄稿に支えられながら、発行していきたいと思います。本教職大学院も皆様とともに学びを深めながら、教師教育のあり方を探していきたいと思います。素敵な2025年度にしていきましょう。(2024年度Newsletter担当一同)

教職大学院 Newsletter

No.192

2025. 3. 31 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp